

津木林 洋

1

清史が健次と一緒にスタジオに着いたとき、隆正と保男はまだ来ていなかつた。彼は舌打ちをした。彼等の遅刻はいつものことだつたが、一週間後にコンサートを控えたきようは、笑つてはいられない。仕方なく二人で、アンプとドラムを車から地下まで、三往復して運んだ。健次はドラムを組立てると、すぐにリズムを刻み始め、これを見て、清史は、あいつらもケンみたいに練習熱心だといいんだがと思つた。

管理人が録音室からガラス越しに見ている。清史は笑いかけ、チューニングが終つてから彼を客と見たてて、ヘビヨンド・ザ・ホライズンの独奏部分を勢いよく弾いたが、途中で間違えて、肩をそびやかした。管理人は腕組みをとくと、自分を指さし、それからスタジオの中を指さした。

「なに？」

聞こえるはずがないのに、清史は思わず言つた。管理人は録音室を出て、スタジオの重いドアを少し開けると、顔をのぞかせた。

「入つてもいいかな」

「そりや構わないけど、おっちゃんにロックがわかるの？」

「いや、わしにはわからんけど、なんか近頃えらく張切つとるようだから」

言いながら管理人は入つてきた。

「そう、コンサート、だよ、コンサート。やつとまともな仕事が舞い込んだんだ」

「ほう、そいつはよかつた。やつと認めてもらえたのか」

「そうさ。これからはじやんじやん仕事をやって、有名になつて、テレビにでもどんどん出てやるさ」

管理人はちょっと笑つてから、

「いいね、今の若い人は。好きなことをやつて生きていけるから」

「好きこそもののかでね。これで金がかせげりやうことないよ」

「そうそう、金のことだけどね」管理人は声をひそめた。「値上げの通知がいつただろ?」

「え? ああ、あれか。ふざけやがつて、五割のアップだつてよ。日曜なんか、おれたちが使わなくちや、一銭のもうけにもならないところなのに」

「いや、それが結構あるらしいよ」

「それはそうかも知れないけど、前途有望なおれたちに低料金で貸してくれても、悪くはないと思うけどな」

かし目は笑いながら

「うちの社長はだめだね。ロツクよりも演歌だから」

そのとき、保男が黒いギターを持つて入ってきた。

「すいません、遅れちゃつて」

「ほう、これはまたお早いお着きで」と管理人がひやかした。

「あ、きつい、きつい、カウンター・パンチ」

保男は頬を押さえる仕草をした。

「どうせ、また女遊びだらう」

きつく言うつもりが、ついふざけた調子になつて、清史は苦笑いした。

「遊びだなんて。おれはいつでも真剣ですよ。真剣に遊んでいる」

管理人は声を出して笑い、「気をつけなよ、女は恐いから」と言つて出ていった。保男は舌を出した。

「あーあ、ひどいめに会つちやつた」

ケースを置くと、パイプ椅子に体を投げ出すようにして坐つた。

「ねえ、キヤップ、泣かれちやつたんですよ、きのう」

「むりやり、やるからだろ」

「違いますよ、ホテルに入るまではにこにこしてたんですよ。それが、い

ざとなつたら泣き出しやがんの。おれ、あつたまに来ちやつた

「それで、そのまま帰つたのか」

「とんでもない。なんとかなだめすかして、やりましたよ。おかげでこつ
ちは睡眠不足」

「ひでえ野郎だ」

隆正がやつて来たのは、それから三十分ぐらいしてからだつた。

「悪い、悪い」

隆正是顔を出すと、すぐに引っ込んだ。ヘマイハンド・インユアハンズ▽のAマイナーの部分を演奏していた三人は、ちらつと見るだけで、そのまま続けた。しかしぬしに、隆正が黒人と一緒に現われると、保男がやめ、清史が気付いて腕を止め、ドラムが中途半端なところでやんだ。スタジオの中が急に静かになる。

「なんだ、なんだ」

保男がギターを床に置いて、近寄つていった。

「おれの友達、名前はフィニー」

「おまえにこんな友達がいたのか」

隆正是笑つて答えない。変な邪魔が入つたな、と清史は黒人を見てつぶやいた。

隆正の要領を得ない説明によると、きのうの晩、飲みにいった帰りにこの黒人に映画館の場所をきかれ、それで案内し、一緒に見て、自分のアパートにつれていつたというのだ。

「だつて、こいつが映画館に泊まるつていうもんだから。そりやオールナイトだからできることもないけど、そんなことするより、おれのところに泊まれって、まあ、そういうぐあいに」

「こいつ、日本語ができるのか」と清史がきいた。

「できないでしよう」

「でしようつて、そうしたら、英語か。おまえ英語できるのか」

「そんなもの知らなくとも、だいたいわかりますよ」

「それで何がわかった?」

「名前はフィニー」

「そのほかには」

「全然」

「それじや、どうやつておまえのアパートへつれていったんだ」

「レツツゴー、マイアパートつていつて。あとは身振り、手振りで」

「お前は長生きするよ」

「フィニーという黒人は、珍らしそうに録音室を眺めたり、壁に寄せてあるピアノをなでたり、ドラムのステイックを取ると、小さくリズムを刻んだりしていた。

「おまえ、ひょっとしたらホモ氣があるのと違うのか」

保男が真顔できいた。

「ばか」

「それでどうしてここへつれて来たんだ」

清史はちょっとといらいらしてきた。こんなことで大丈夫なのかと思う。

「おれが練習に行くつて、ギターを弾く真似をして説明したら、一緒に行くつて言うものだから」

「へイ、フィニー、と清史は手招きした。フィニーは軽いステップを踏みながら近づいてくる。

「おれは清史、こいつは保男、こいつは健次」と清史は英語で紹介した。

「隆正は知ってるだろ?」

かつこいい、と保男が叫んだ。

「タカマサ?」フィニーは変な発音をして、隆正を見た。

「おれ、リュウって教えたんだ」隆正は首をすくめた。

「リュウっていうのはニツクネームだ」と清史は説明した。

「オー、アイシー」

フィニーは目を見開いて、首を縦に振った。

「アイム……」

聞き取れない。「え?」

フィニーはもう一度言い、それからゆっくりと発音した。フインリンソンと言っているのがわかつた。

「フインリンソンが本名か」隆正が納得したようないいような顔でつぶ

やいた。

「フイニーというのは、あんたのニックネームなのか」と清史がきく。「イエス」そして粘りつくような発音で、まくしたてた。

「何て言つたんです?」保男がきいた。

「そんなこと、おれにわかるか」清史はどなるように答えた。「どこから来たんだ?」健次がなめらかな英語できいた。

「カリフォルニア」

「おっ」と保男が言つた。「ケン、おまえ、英語ができるのか」「高校のときに、ESSに入つていたから」

健次は照れ臭そうに答える。

それから、彼等は簡単な英語を駆使して、フイニーが二十七才であること、きのう船で日本に着き、一週間ぐらい滞在すること、アフリカに行く途中であることなどを知つた。

「アー・ユー・ニグロ?」

ふと保男が英語を試すみたいな軽い気持で尋ねた。三人は笑つていたが、その瞬間、フイニーの顔は引きしまつた。

「ノット・ニグロ。アイム・ブラック!」

フイニーは親指を自分の胸に突き立てて、叫んだ。訳がわからない。清史はどうにでもなれという気持で、聞きかじりの文句を口にした。

「ブラック・イズ・ビューティフル」

すると今度は、フイニーが呆気に取られた表情をし、清史たちと見つめあう恰好になつた。

突然、フイニーは笑い出した。おかしさが腹の底から湧き出てくるみたいに体を搖きぶり、清史の肩を大きな掌でつかむと、何か言葉を連発しながら笑いこけた。

「あやまれよ」と隆正が言つた。「どう言うんだ」と保男は健次にきき、あやまつた。

「ネバー・マインド……」

まだ笑い声だつた。

「変なやつ」と保男が言つた。

- 5 -

清史たちが練習を始めて、フイニーはスタジオを出ていこうとはしなかつた。壁のそばの椅子に坐つて、右足でリズムを取つてゐる。気が散るから出でていつてくれと言いたかったが、たかが黒人一人でおたおたするのはおかしいと清史は意地になつていた。感覚を慣らすための△フオ・ニア・ラヴ▽はもう自分たちのものにしているので、割合うまくいった。ボーカルの部分はさすがにやりにくかつたが、清史は発音に自信があつたので、堂々と歌いまくつた。

だが次の△ビヨンド・ザ・ホライズン▽は習得してまだ日が浅く、通して演奏したのは二、三回しかない。うまく合わないのは仕方がなかつたが、きょうのは特にひどかつた。清史は何とか我慢して弾いていたが、ドント・ギブ・ミーと歌うところで、呆れ返つて、だめ、だめ、と手を振つた。「どうも、リズムのりが悪いなあ。リュウ、おまえ、走り過ぎじやないの。それにヤスオ、おまえはフラットになつてるなあ。もつときばつてみろよ」

「そうかなあ」

保男は首を傾けながら、小さく弦をはじいた。やつぱり、あいつを追い出したほうがいいかと清史はフイニーを見た。フイニーはウインクをしてみせた。

「あんた、ロックが好きなのか」と清史は声を掛けた。

「イエス……」と言つて何かしやべつたが、わからない。え？　という顔をすると、フイニーは椅子から立上がりつて、近づいてきた。そして「グッド・フィーリング」と言つた。いい感じ、か。

「サンキュー」と清史は、▽サインを突き出した。フイニーは早口で何か言つた。笑いながら、またウインクをした。

一時過ぎに、由美子が昼食を持つて現われた。赤いバスケットを下げている。「めしだ、めしだ」と清史たちはギターストラップを肩からはずした。

「あら、新しいメンバー？」

フイニーを見つけると、由美子は驚いた顔をした。フイニーはやあとい

うように手を振った。

「リュウがつってきたんだよ」と保男が答えた。

「へえ、リュウくんが……」

清史が手短かに説明した。

「おもしろいわね」と由美子はフィニーに目をやつた。

「先生、英語もできるんだろ?」と隆正が言う。

「簡単な会話ならなんとかなるわ」

清史がフィニーを呼んだ。一緒に昼食を食べようと思ったのだ。フィニーは近づいてくると、右手を由美子に向け、清史に何か言つた。

「何て言つた?」と清史は由美子にきいた。由美子はおかしそうに笑つている。

「何て言つたんだよ」

「この魅力的な女性を紹介してほしいって」

「よく言うよ、こいつ」と保男がフィニーの脇腹を軽くこづいた。

「彼女は北沢由美子。おれたちのパトロンだ」

そこまで言うと、清史は「えーと、それから」とつまつた。

「中学校の数学の先生って、どう言つたらいいんだ」

「いいわ。自分で言うわ」

由美子はきれいな発音で自己紹介した。さすが、と隆正がはやしたてた。

フィニーが何か言い、由美子がうなづく。

「何て言つたんだ」清史がもどかしそうにきいた。

「彼も先生をしてたんだって。高校の、歴史の」

「へえ、同類か。それで、歴史の先生がどうしてアフリカなんかへ行くんだ」

「きくの?」

「いや、別に。どっちでもいいけど」

由美子が質問すると、フィニーは天井を向いてちよつと考え込み、ぽつりと言つた。由美子はきき返し、うなづくと、

「一種の冒険だつて」

「冒険? 変なの」

「めしにしようよ」と保男が突拍子もない声を出した。

由美子の持つてきたものは、握り飯とハンバーガーとフライドチキンだった。フィニーにも勧めると、「サンキュー」と言って見ていたが、やがておにぎりを黒い指でつまむと、不思議そうに眺め回した。由美子が説明する。彼はうなずいて、それを口に含み、半分に割った。そして中から出てきた赤いものについて説明を求めた。梅干の肉だ。由美子は説明に窮し、適当にごまかした。フィニーは納得のいかない顔で、口に放り込むと、瞬間に顔をしかめた。清史はあやうくハンバーガーを吹き出しそうになつた。食事が終つたあと、清史たちが練習を始めようとしたとき、フィニーがピアノのことについて何か言つた。清史はすぐに由美子を呼んだ。

「ピアノを弾いてもいいかってきいてるわよ」

「ピアノが弾けるのか」

由美子がフィニーにきいた。

「ちよつとやつてたんだって。あなたたちの演奏を聞いていて、急に弾きたくなつたって言つてるわ」

「それを早く言えよ」と清史はうれしくなつてアイニーの肩を叩いた。

「リュウ、頼む」

隆正はOKのサインを指で示すと、ピアノに近づき、ポケットから針金の切れ端を取出した。そして、膝をついて鍵穴にそれを突込んだ。

少しして、「やつたぜ、ベイビー」という声とともに白と黒の鍵盤が見えた。清史たちはピアノをドラムとうまく釣り合う位置まで押した。

フィニーは指を二、三度屈伸させてから、音を試すために、音階から短かいメロディを軽く弾いた。椅子に坐つて見ていた五人は、やるうという顔で互いに見交した。フィニーがこっちを見て笑つた。突然、由美子が拍子をし、清史たちもそれにつられて手を叩いた。

フィニーが弾き始めた。音がはじけるようだ。ジャズだ。軽快なテンポに微妙に変化するハーモニー。

「ナイト・アンド・デイだ」と健次が言つた。

フィニーの指が鍵盤に吸い寄せられるみたいに、行きかつてゐる。上体が曲に乗つて、揺れ動いてゐる。保男も隆正も首を振つて、足でリズムを

取る。高く低く、あるいは細かく繊細に、そしてまた、ダイナミックに流れるピアノの音が、快く清史たちを包み込む。

演奏が終つた。健次が真っ先に手を叩き、うおうと保男がうなつた。

「やるなあ」「すげえ、すげえ」

清史たちはフイニーを取り囲むと、まるで彼が日本語を知つてゐるかのようにはしやいだ。

「素晴らしい演奏だつたわ」由美子が英語で言つた。

「サンキュー」

フイニーは白い歯を見せて笑つた。

清史たちのアンコールで、彼はもう一曲弾き、清史はふと思いついて、ちよつと一緒にやつてみないかと誘つた。フイニーは軽く応じた。
「ビートルズをやろうか」と清史が提案すると、保男たちは歓声を上げた。バンドを結成した當時、自動車修理工場の倉庫を借りて、よく練習したやつだ。

「フイニーは？」

「オーケー」

少し考えて、ヘゲットバツク＼から始めた。最初のうちは呼吸が合わなかつたが、そのうちピアノが溶け込んできて、一体となつた。体が熱っぽくなる。

フイニーとの共演のあと、コンサートの練習をしたが、終つたのは六時過ぎだつた。管理人が姿を見せなければ、一晩中でも練習していくかつたが、契約が五時までなので仕方がない。

アンプやドラムを駐車場の車まで運ぶと、清史たちはフイニーの回りに集つた。

「これからどうする？」と隆正が言つた。

「どうするつて、どういうことだ？」清史がきき返した。

「たとえば……」いつをつれて『ガリバー』へ飲みに行くとか

「バカ」

できれば清史もそうしたかつたが、今は金がない。コンサートの練習の

ために、仕事はライブハウス『無常』のステージだけで、生活のためのアルバイトはみんなやめている。由美子が出してくれないかなと思って、清史は彼女に目をやつたが、由美子は赤いバスケットを胸にかかえて、すましているだけだ。

「なんか悪いみたいだなあ。せっかく日本へ来たっていうのに」と保男が言つた。

「心配しなくてもいいわよ」突然、由美子が口を開いた。「あした、わたしが東京を案内することになつてゐる」

「あしたつて、学校は？」と隆正がきく。

「休みに決まつてるじやないの。十一月三日よ。ブンカの日」

「ああ、そうか。忘れてた」「どうしておれたちみたいな若者の文化をになう人間に、金が回つてこないのか。これは問題だなあ」

保男が芝居がかつた声で言つた。

「若者の文化つて柄か」

清史が保男の頭をこづく。由美子もフイニーも声を出して笑つた。

2

「ねえ、キヤツプ。大丈夫ですかね」

『無常』の控え室で待機しているとき、保男が言つた。

「なにが？」

「先生とあの黒人ですよ」

「だから、なんだよ」

「わかってるくせに」保男は隆正を見た。「なあ、リュウ」

隆正は女の子が保男に持つてきたウイスキー・ボンボンを口に入れながら、にやにや笑つてゐる。

「あいつのあそこ、すぐえでつかいんですよ」と保男が清史の顔をのぞき込んだ。

「おまえ、見たことがあるのか」

「いや、おれじゃないけど、リュウがきのう見たつて」

「きのうね」と隆正が言つた。「あいつを錢湯につれていつたんですよ。あんまりくさかつたもんだから。そこでばつちり。おれ、がつくりきちやつた」

「大きいだけがすべてじやないさ。それに……」

清史は口をつぐんだ。由美子のやつがそんなことをするかと言おうとして、急に気になり出したのだ。

清史が由美子と知合つたのは大学のときだから、もうかれこれ五年になる。大学を卒業したら終りにするつもりの付き合いが、いつの間にか今まで続いている。半年以上も会わなかつたりしたことがあつたが、しかしそういうときに限つて、清史のほうに問題が起り、彼は由美子を呼出して、しゃべりまくつた。営業で入つたKプロダクションをやめたときもそうだったし、バンドを結成しようと思つたときもそうだつた。よく会うようになったのは、バンドの仕事がうまくいかず、解散しようとしていたとき、由美子が金を貸してくれた四月以来だ。

「おれには関係ないさ」と言つて、清史は煙草に火をつけた。

「そんなこと言つて、いいんですか」

隆正が意味ありげな顔で言う。

「あいつはあいつ、おれはおれ。なあケン」

「さあ」と健次は笑つた。

「なんだ、おまえまで」

出番がきて、ドラムを運び、彼等は薄暗いステージに立つた。煙草の煙と汗くさい熱氣が体を包む。チューニングをし、アンプの音量調節。健次が軽くドラムを叩く。それぞれが勝手に音節を弾いて、自分のギターの音を確かめる。清史はこの時が一番好きなのだ。

ライトが当る。前の方に陣取つた五、六人の女の子が「ヤスオー」と一斉に叫んだ。

「なんだい」保男が手を上げる。どつとみんなが笑つた。

夏にビアガーデンで演奏したときは、拍手も声援もなくて、清史たちはみじめな思いをしたものだつた。客たちはゴーゴーガールを見るだけで、

演奏など聞いておらず、要するにゴーゴーガールの踊れる音楽が景気よく流れいたらそれでいいのだ。健次や保男は馬鹿ばかしいからやめようと言つたが、隆正だけは、ただで生ビールが飲めるので喜んでいた。その仕事がすんでから、清史はプロダクション時代のつてをたよつて走り回り、この『無常』での仕事を取つてきたのだ。

「ワン、ツー、ワン、ツー、スリー、フォー」

彼等はハグルーミースカイヽをやり始める。

一回目のステージが終り、四人が控え室でコーラを飲み、差入れのせんべいをつまんでいる時、『無常』のマネージャーが顔をのぞかせた。

「内藤くん、ちょっと」

マネージャーは掌をひらひらさせて、健次を呼んだ。コーラのびんを口にしていた健次は、えつという顔をし、急にむせた。コーラが口の端からこぼれ、それを手の甲で拭うと、彼は三人をちらつと見やつた。

「お呼びですよ、女の子から」

保男が笑い声で言つた。

「みよちやんには内緒」

隆正が付け加えた。健次はその言葉に苦笑いしながら立上がり、出でいつた。

「ケンはどうも変ですよ」

保男が声を落して言つた。

「どう変なんだ」

清史はとうに気づいていたが、わざととぼけた振りをした。

「だつて、ここ一週間ほど沈んでいるみたいだし、ドラマだつて、なんか前みたいに、ぱつと乗つてこない感じだし、……そりやうまいことはうまいんだけど、何となくもうひとつねえ」

保男はそこで隆正の方を見た。「おまえもそう思わないか」

隆正はせんべいを口に含んだくぐもり声で、「思う、思う」と首を縦に振つた。

「馬鹿野郎、何がもうひとつだ。それはおれがおまえらに言いたいセリフ

だよ。さつきの演奏にしたつて、第四小節のAマイナーからAセブンに移るとき、サイドが遅れるし」と清史は隆正を指さした。「ヤスオ、おまえは目立ちたがつて、変な音を入れるしな」

「あーあ、やぶへび、やぶへび」保男は舌を出した。

「ちよつとトイレに行つてくる」

そう言つて清史は立上がつた。

「あ、おれも」と隆正も立上がりかけたが、「おまえはあと」と清史はわざと強い調子で言つて、ひとりで外に出た。薄暗い廊下の突当りにトイレがあり、その途中を、事務所のドア越しの明かりがぼんやりと照らしている。清史は足音をさせないように歩き、ドアの所で立止まつた。中から健次の小さな声が聞こえ、知らない男の声が、それのかぶさつた。

おれは立ち聞きするんじやないぞ、と清史は胸の内で叫び、しかしやはり足音をたてないようにトイレにいった。あまり出ない小便をして戻るとき、清史は再びドアのそばに立つた。

「……だからリーダーにはぼくがちゃんと話をつけるから、きみは心配しなくていいんだよ。きみはただ、移りますつて言えばいいんだ。こんなチヤンスは滅多にないよ」

健次の引っこ抜きの話だと清史にはぴんときた。この声の男はどこかのスカウト野郎だ。清史はムカツとなつた。この大事な時に、引き抜きの話なんか持つてきやがつて。今度の日曜には初めてのコンサートがあるんだぞ。よりによつて健次に目をつけやがつて。清史はノブを乱暴に回すと、体当りするような感じでドアを開けた。

ソファーに向い合つて坐つていた健次とスカウトの男が同時に清史の方を見た。健次ははつと顔をこわばらせ、すぐにうつむいた。スカウトの男は赤い派手な、ネクタイをして、髪をてかてかに光らせ、薄く色のついた眼鏡をしていた。清史を見て、一瞬けわしい顔をした。

清史は何か言おうとしたが、熱くなつた頭の中で様々な言葉がぶつかり合つだけで、口からうまく出てこない。

「これはちょうどよかつた。あなたに今、話にいこうと思つていたところなんですよ。まさにグッドタイミングだなあ」

スカウトは大袈裟に手を上げて見せた。清史はその言葉を無視し、二人のところに歩み寄つていくと、「行こう」と健次に声をかけた。健次はうつむいたまま、小さくうなずき、腰を上げかけたが、それをスカウトが右手で制した。

「ちょっと待つてよ。ぼくの話も聞いてよ。ねえ、リーダーも一緒に坐つて、三人で納得のいくまで話そうよ」

「話なんかないですよ。ケンの引っこ抜きの話だつたら、絶対にお断りだ」

「弱ったなあ。そんなふうに言われると、ぼくの立つ瀬がないなあ」

スカウトは苦笑しながら、後頭部を指でかいた。

「でもね、これは内藤くんにとつて、絶好の機会だと思うんですよ。何しろ、ゼッドのドラムですからね」

スカウトはそこで反応を見るみたいに言葉を切つて、清史をじっと見た。ゼッドというのは独特の強烈なサウンドで、いま売出し中のロックグループである。そのドラムスが血小板減少性紫斑病とかいう病気にかかつて長期療養をしなければならなくなつたという話は、清史もすでに知つていた。

清史は胸にパンチを食らつた氣がした。そのパンチのため言葉が詰つて出てこないのだ。確かにゼッドに入れば、ケンは有名になるだろう。そしてそれはおれたちが夢にまで見てきたことなのだ。しかしそんなに簡単なことなのか。ゼッドに引っこ抜かれる、有名になる。そんなに単純なのか。ちがう！……いや、おれはケンにしつとしている？……ばかやろう！

清史は腹が立つてきた。ゼッドと聞いて言葉に詰つた自分にも、こんな話を持つてきた、きざなスカウト野郎にも、そしてその話に乗りかけている健次にも……。

「いくらゼッドだつてお断りだ。おれたちはずっと四人でやつていく。今まで一緒にやつてきたし、これからも一緒だ。ゼッドなんかくそくらえ」いくらタンカを切つても気持がすつとしないことに、清史はまた腹を立てた。スカウトは余裕を持った笑いを見せながら、

「そりや、あなたの言うことはよくわかりますよ。今まで一緒に苦労して

きたという意味ではね。しかし、いくらリーダーでも、内藤くんが移りたいって言つたら、とめようがないでしよう。ゼッドに入れれば、今までの労が報われるんだから」

「おまえ、移るつて言つたのか」

清史は健次の肩に手を置いて言つた。健次は首を横に振つた。

「だから、そこは話し合いなんですよ。あなたのグループにはそりや痛手かも知れませんけど、その埋合せはきちんとやりますよ。金錢的にも、仕事の面でも、それに内藤くんの代りは、ぼくが責任を持つて見つけてきます。それは絶対保証しますから」

スカウトは真面目な顔になり、熱っぽい口調で話した。

だつたら、その代りをゼッドのドラムスにすえたらしいじやないか、とよほど清史は言いたかつたが、そういう言い方はあまりにも見えすいた楊げ足取りなので、さすがに口にしなかつた。つまり、ゼッドのドラムスには健次しかいないと判断して、引っこ抜きの話を持つてきているのであって、その代りという人間は明らかに健次よりへたつぴいなのだ。へたつぴいをスカウトするなどということは、スカウトの意味がなくなつてしまふ。「要するに、おれたちのグループはへたつぴいで我慢をしろということですかね」

せめてもという感じで、清史は皮肉を言つた。スカウトは、えつという顔をし、それから、声を立てずに大笑いした。

「行こう」

清史は健次を促した。健次はためらうように、ちらつとスカウトを見ながら、腰を上げた。スカウトは「まいつた、まいつた」とつぶやいて、後頭部をかいていた。

二人がドアの所まできたとき、後ろからスカウトの声が飛んできた。

「内藤くんの奥さんが妊娠していることは知つてゐるんでしようね」ノブに手をかけていた清史は、ハツとして、思わず振向きかけたが、首がわざかに動いたところで、かるうじて踏みとどまつた。そして、改めてゆつくりと首を回した。スカウトが皮肉な笑いを口許に浮べて、こちらを見ている。

「ええ、知つてますよ」

わざと静かな調子で言つてから、清史は健次を引張るようにして廊下に出た。

控え室に戻る途中で、「妊娠つて、本当か」と清史は小声できいた。健次は小さくうなずいた。

なんてこつた、と清史は胸の内で叫んだ。よりによつて、こんな時に妊娠するなんて。

「で、何ヶ月だ」

「三ヶ月」

どうしておれに真つ先に知らせなかつたんだと言いたかつたが、やめた。

「それで、どうするつもりなんだ」

「……」

「そうだよな。こういうことは女の方が決める」となんだよな。……みよちゃんは生むつて言つてるのか

「できれば生みたいって」

くそ、と清史は舌打ちをした。これで健次は引つと抜かれ、バンドは解散。せつかくうまくいきかけたのに、あえなく沈没か。

しかしそう簡単に諦めるわけにはいかなかつた。とにかくあしたみよ子に会つてみようと清史は考えた。

「よし、あした、おまえのところに行く。みよちゃんは仕事か」

みよ子は喫茶店のキヤツシャーをしているのだ。

「いいえ、ここ三日ほど、気分が悪いつて休んでるんです」

「つわりか」と清史はつぶやいた。「それじやあ、昼間いつてもいいな」「ええ」

控え室に戻ると、保男と隆正が意味ありげな笑いを浮べて、二人を迎えた。

「なんだ、なんだ」と清史が言うと、「聞きましたよ」と保男が言い、健次の方を見た。

「なにを?」と清史はとぼけてみせたが、今度は隆正が、そんなことはおかまいなしといった調子で、

「ゼッドのドラマなんて、いいなあ」

「おまえ、立ち聞きしたのか」

「だつて、トイレに行く途中で、自然に聞こえちゃつたんですよ」

余計なことを聞きやがつてと思ったが、もうどうしようもなかつた。

「すげえなあ。ゼッドだなんて。このう、うまいことやりやがつて」

保男が健次の脇腹を肘でつついた。健次は苦笑いともつかぬ複雑な表情を見せた。

「ほんとに、あのヘンチクリンな病気、さまさまだなあ」と隆正も素直に喜んでいる。

清史はまた腹が立つってきた。

「馬鹿野郎、まだケンがゼッドへ移ると決つたわけじやないんだよ。ただそういう話があるつていうだけのことだ」

「あれ、それどういうことですか。むこうからスカウトに来たんでしょ」保男が揶揄するよう言う。そして隆正と小声で何やら話してから、「キヤツプは馬鹿野郎とか何とか言つて、追い返したんでしょう」

「当たり前だ」

「ああ、オーボー」保男と隆正は声を合わせて言い、うまく合つたことで、笑い声を立てた。

「横暴、大いに結構。おれは少なくとも、このバンドのリーダーだからな」

「おれ、心配になつてきたな」と保男が言う。
「どうしてだ」

「おれがスカウトされそくなつても、キヤツプが親指でひねりつぶすんじやないかと思つて」

「おまえは大丈夫。そんな心配しなくてもいいよ」

「あれ、それどういう意味。なんか侮辱されてるみたいだな」保男は隆正の方に向か、「な、いまのは侮辱だよな」

隆正は「さあ」と言つてとぼける。健次はそんなやりとりを、小さく笑いながら見てている。

二回目のステージに立つて、ハマイハンド・インユアハンズ▽を演奏しているとき、保男が清史の耳許で、「キヤツプ」と声を出した。演奏中に余計な声を出しやがつて、と保男を見ると、彼はあごで右の方の客席を示している。清史は目を細め、保男の示す方向を見た。自分達にスポットライトが当つているため、客席は暗く、よく見えないが、誰かがこちらに向つて手を振つている。じつと見ていると、さらに勢いよく振り、しばらくして由美子であることがわかつた。

なんだ、あいつ、と清史は思つた。由美子が彼等の演奏を『無常』に聞きにきたのは、彼等が最初にここに出演したとき以来なのだ。なんでも、と思ったとき、清史ははんと気がついた。フイニーをつれてきたのだ。間違いない。そう思つて見ると、はたしてフイニーが由美子の横にぴたりと寄添つてゐる。色が黒くて、いるのかいなかわからぬが、白い掌を高くかかげている。

清史は照明係に合図を送つて、赤い光に変えてもらつた。こうすると、客席がよく見えるのだ。フイニーは由美子に寄添うだけでなく、肩に腕を回し、時々、彼女の耳許に口を近づけて、何か言つてゐる。由美子はその都度、微笑んだり、首を振つて笑つたりしてゐる。清史にはそれが頬に口づけをしてゐるよう見えて仕方がなかつた。

由美子のやつ、酔つてゐるのか。それにしても、あの黒人、慣れなれしい野郎だ。

ソロパートがきて、清史は弦を叩きつけるように弾いた。何もかも無性に腹が立つてきた。しかし、右手だけに神経を集中したばかりに、ほとんど間違えたことのないところで、左手の押えを失敗し、一瞬、それまでの音の流れとは別の高い音が鳴つてしまつた。はつとしたが、もう遅い。清史は打弦を抑制して、ごまかそうとしたが、そうすると音量がまるで違つてしまい、余計に失敗が目立つてしまつた。

ソロパートが終つて、保男の方をちらつと見ると、彼は今にも吹出しそうな顔をしている。清史はますます面白くなかった。

だから、というわけでもなかつたが、演奏が終つてから、清史はあることを思いついた。フイニーを自分達の仲間に加えようというのだ。そうす

れば由美子とあいつが、いちやついているところを見る事もないし、おれだつて馬鹿な間違いをしないですむ。

清史は他の三人に相談もしないで、いきなりマイクに向つてしゃべり始めた。

「それじやあ、ここで、ビートルズナンバーをイツパツやつてみたいと思うんだけど、どうだろう……いいかな」

いい、いい、やれ、やれ、という声と共に拍手が起つた。保男たち三人を見回すと、呆気にとられた顔をしていた。保男がそばに来て、「どうしたんです。ヤードバーズはやらないんですか」と不満そうに言つた。

「いいから、いいから、おれにまかしとけ」

そう答えて、清史はまたマイクに向つた。

「その前に、ここで一人の、ゲストを紹介しよう。わたくしのために、アメリカからわざわざ来てくれた、ピアノの名手(とそこで彼は右手をさつと由美子たちの方へ伸ばした)フイニー！」

客達は清史の示した方向に顔を向けた。客席がざわめく。由美子がフニーに何か言い、それにうなずいてから、フイニーが立上がりつた。あたりをうろついていたスポットライトが彼をとらえた。

「ヘイ、フイニー！」

清史は掌で輪を描くようにして、彼を呼んだ。フイニーは、何だかわからぬというような顔をしている。清史は指で鍵盤をたたく真似をし、それから、ステージを指さした。由美子が下から何か言い、フイニーは腰をかがめて、それを聞いた。ようやく彼はわかつたらしく、笑いながら通路に出てきた。スポットライトが彼を追う。

「拍手……」と清史はマイクの前で手を叩いた。それにつられるように、若者たちも一齊に拍手をした。隆正と健次は早速、壁際につけてあるピアノを移動させ始めた。保男は、なかなかうまいことを考えましたねというような笑顔で清史を見ている。

スポットライトと共にフイニーがステージに立ち、清史はもう一度、「拍手」と手を叩いた。前よりも大きい歓声が起つた。

「ビートルズ、オーケー？」と清史が言うと、「オーケー」とフイニーは

答え、ウインクした。誰かが口笛をならす。

「それでは、まずゲットバックから」

きのうの練習が思わぬところで役に立つた。最初からほんと息が合い、清史は、コンサートでも一緒にやれるんじやないか、と思つたほどだつた。

フイニーとの共演が終つて、清史たちが控え室に引込むと、すぐに由美子が顔をのぞかせた。

「はい、これ差入れ」

ドーナツと紙パック入りのジュースだつた。

「わあ、すげえ」保男が奇声を上げた。隆正が「さすが」と言いながら受取り、すぐにつまみ始めた。

「それじやあ、わたし、帰るわ」と由美子が言つた。

「最後まで聞いていかないのか」

もう一回、出番があるので。

「ううん、きょうは疲れちゃつたから帰るわ。悪いけど」

「フイニーは？」

「彼は最後までいて、リュウくんと一緒に帰るつて」

「そうか」清史は少しほつとした。

「がんばってね」と他の三人に声をかけて、由美子はドアを開けた。清史も立上がりつて、一緒に部屋を出た。

「キヤップ、先生にお礼を言つといでよ」と保男のひやかし気味の声が聞こえてきた。

「おもしろいわね、保男くん」

「あいつはいつもああだからね。……ところできょうはどうだつた？」

「何だかお上りさんになつたみたいな氣分だつたわ。皇居へ行つたり、東京タワーに上つたり

「みんなが見ただろう」

「そう、そう、じろじろ見られたわ。六本木でね、腕を組んで歩いていたら、変な男がわざわざ前に回つてきて、わたしたちを見るのよ。わたし、頭にきて、にらみつけてやつたけど、全然こたえないので。変に笑つてゐる

だけ。ほんとにいやらしいわ。黒人と歩いているのが、そんなに珍しいのかしら」

それは、そいつが変な想像をしたからだよと言おうとして、清史はやめた。何だか自分のことを言わわれているような気になつたからである。

従業員出入口のドアを開けて、外に出たとき、清史は、みよ子の妊娠のことと思い出した。ひょっとしたら金がいるかも知れない。そう思うと、今のうちに由美子に言つておいたほうがいいという気になつた。

「急な話で悪いけど、十万円ばかり都合してくれないかなあ。今度のコンサートでいろいろといふんだ」

由美子は口をとがらせて、困った顔をしたが、目は笑つてゐる。

「また、アンプ？」

「うん、まあね」

ちよつびり良心がとがめたが、この際仕方がない。

「いいわ、何とかするわ」

「恩に着るよ」

「それで急ぐの」

「いや、いる時はこっちから電話するよ」

「そう」

「じゃあ」

由美子の後姿を、清史は悪いことをしたような気分で見送つた。

3

次の日、清史は昼近くまで寝ていた。目が覚めてからも、きょうみよ子にどう話したらいいかと考えると、なかなかふとんから出る気になれなかつた。きのう寝る前にもいろいろと考えてみたが、結局は、今回はみよ子に諦めてもらうしかないというところに落着くのだ。そうでなければ、スカウト野郎の思うつぼになつてしまふ。

よし、決めた、と掛け声をかけて、清史はふとんから出、服を着換えた。近くの食堂で昼食をすませ、さあ、健次のアパートへ行こうと思つたが、

どうにも気が重い。清史は喫茶店に入つて、もう一度考えてみることにした。

みよ子がどうしても生みたいと言つたら、そのときはどうする？ みよ子に実家があれば、しばらくの間、そこで面倒を見てもらうのが一番いいんだが、彼女は一人だし、健次の両親にもそんな余裕はないだろう。いつのことおれたちで面倒を見るか。いや、だめだな。保男やリュウが金を出すはずがないし、だいいち、あいつらはあつきりとこう言うだろう、ケンがゼッドに移つたら、一番いいんだよ。

清史はいらいらってきて、近くの棚から漫画雑誌を五冊ばかり持つてきて、テーブルの上に積み、片つ端から読み飛ばしていった。くそ、面白くもないとつぶやきながら、それでも全部読んだ。読み終つて、カウンターのところへ行き、ピンク電話の受話器を取つた。健次とみよ子がアパートにいるかどうか、確かめてみるのだ。

管理人が出、それからしばらくして、健次の声が聞こえてきた。

「今から行くけど、みよちゃんはいるか」

「ええ」

「気分はどうなんだ」

「何か、いいみたいです」

「それで、おれが行くつて言つてあるのか」

「いいえ、それはまだ」

「そうか。……あ、それからな、そつちへ行くまえに聞いておくけど、みよちゃんが生みたいつて言つてるのは、おまえがゼッドに移ることを前提にしているわけか。それともそれには関係なく……」

「おれ、まだゼッドのことは何も話していないんです」

「え、本当か」

それは好都合だと思つたが、しかしそのことを伏せて、みよ子と話合うのは卑怯だという氣もする。

「もう一つ聞いておくけど、おまえは一体どう考えているんだ。そのところをはつきりと聞いておかないと、みよちゃんに会つても話しようがないからな」

「……」

「どうなんだ。何でもいいから言つてみろよ」

「おれ……よくわからないんです。初めてみよ子から妊娠のことを聞いたとき、子供なんてとても無理だと思ったんだけど、みよ子は生みたいつて言うし、ゼッドの話も舞込んできて、正直言つて、迷つてるんです。でも、おれ、ゼッドには移りたくないし……」

「よしわかった。それじゃあ、今から行く」

そう言つて、受話器を置いてみたものの、みよ子にどういう風に話をしたらよいのか、清史にはわからなかつた。なるようになれ、だ、そうつぶやいて、彼は喫茶店を出た。

健次の部屋のドアをノックすると、出てきたのは、みよ子だつた。

「あ、キヤツプさん」そう言うと、みよ子はすぐに顔を引込んだ。

「健ちゃん、キヤツプさんよ」

「うん、上がってもらえよ」

ケンはおれの来ることを話していないらしいなと清史は思つた。

「さあ、どうぞ。散らかしてますけど」

再び顔を見せたみよ子は、そう言つて、ドアを大きく開けた。

部屋は六畳と四畳半の二間で、四畳半の一部が板の間になつていて、そこに小さな流しのあるのが、竹のすだれ越しに見える。みよ子の言葉とは裏腹に、部屋の中はきれいに整頓されていて、清史は自分の部屋との違いを思うと、少しうらやましくなる。

「みよちゃん、妊娠したんだって」

面と向つて言うのは、いかにもわざとらしい気がして、みよ子がお茶をいれるために台所に立つたとき、彼女の背中に向つて言つた。

「ええ、三ヶ月なんんですけど……」

みよ子の当惑したような声が返つてくる。

「それで、どうすることにしたの？」

清史はできるだけ軽い調子できいた。健次が心配そうな顔をしている。

「それが、健ちゃんがあまり嬉しそうな顔をしないものだから……」

みよ子は素直に答えた。清史の、中絶するかどうかのニュアンスを含んだ言い方を、別に気にするふうでもない。これはいけそそうだと清史は思う。

お茶を運んできたみよ子は、卓袱台の上に湯呑みを三つ置くと、きちんと正坐して、健次と顔を見合させた。

「子供ができるとなると、大変だなあ」

言つてから、清史は、そのいやらしい言い方に自分でも嫌になつた。思い切つて、中絶しろと言つたらどうだ、と自分に腹を立てる。

「あたしが働けなくなつたら、健ちやん、ドラムばかり叩いていられないし……」

「申し訳ない」清史は頭を下げた。

「あ、ごめんなさい。あたし、そういうつもりで言つたんじやないんです」

「いや、それはわかつてゐけど、なにしろ本当のことだから」「本当にごめんなさい」

健次を見ると、彼は湯呑みを両手に持つて、少しうつむき加減にしている。さつきから何も言わないのは、おれがここへ来た目的を知つてゐるせいだろうな、と清史は思う。しかし彼はそのことをどう切出したらいよいのか、まだわからないのだ。

「でも、あたし、生みたいんです。健ちやんは、あたしが生むつて言つたら、絶対反対しない人だから、いいんですけど、でも無理して生んで、健ちやんのやりたいことができなくなつたら、それも困るし……」

「子供ができたら、ここ追い出されるの？」

清史は話を変え、またこんな自分に嫌気がさす。

「ええ」と言つて、みよ子は部屋を見回した。

清史は急に、何もかも話したくなつた。ゼッドのことも、健次の気持も、おれたちグループのことも、そして自分が中絶を勧めにきたことも。もつて回つた言い方はもうたくさんだと彼は思う。

「実はね……」と言つて、彼は健次に目をやつた。「健次に、ゼッドのドラムスにならないかっていう話がきてるんだ」「キャップ」と健次が言つた。

「……ゼツドつて、あの△燃える嵐▽の……」

みよ子は驚いて清史をじっと見、彼がうなずくと、健次のほうに向いた。

「健ちゃん、それ、ほんと？」

「ああ」

健次がばつの悪そうな顔で答える。みよ子は見開いていた目を笑うように細めて、

「健ちゃん、ずるいわ。あたしに何も言つてくれないなんて」

「でも、まだ決つたわけじゃないから……」

「決つても決らなくても、そういう話はちゃんとするものよ。あたしたち、夫婦なんだから」

みよ子は子供にさとすように言う。清史は思わず笑つてしまつた。

「だから、経済的にはそう心配はいらんだけど……」と清史は話し始める。健次がスカウトに返事を延ばしているのは、おれたちのグループから離れたくない気持と、子供を育てるためにはゼツドに行かなければいけないという気持の間で迷つてているためだということ。もし健次が抜けたら、代りを探すのは困難だということ。

「せつかくチャンスが巡ってきたのだから、せめてもう一年、時間が欲しい」と清史は言つた。「はつきり言つて、きょうはみよちゃんに諦めてもらいたいと言ひに来たんだ」

みよ子は、ぴんと伸ばした両手を膝の上に置き、卓袱台の一点を見つめている。清史はあわてて付け加えた。

「でも、何だかんだと言つても、結局はみよちゃんが決めることなんだから、気にしないでくれよな、ほんとに」

しかし、みよ子は堅い表情を崩さない。

「そう深刻になられると、弱つちやうなあ」

清史は保男が言うような口調で言つたが、自分でも間が抜けてると思う。しばらく沈黙が続いてから、みよ子が顔を上げた。

「ほんとに、一年待つたら大丈夫ですか」清史の目を見つめて言つた。清史は一瞬答えに詰つたが、ここでは胸を叩く以外にない。

「うん、必ず食えるようにする。そりやゼツドのようにはいかないかも知

れないが、大丈夫だ」

と思う、と言いたいのを清史は何とかこらえた。みよ子はじつと清史の目を見つめていたが、やがて、ふつと笑うような表情を見せた。

「あたし、赤ちゃん、諦めます」

「みよ子、おまえ……」と健次が顔を上げる。

「いいの、いいの。あたしも妊娠つてわかつたときから、何かだめなような予感がしてたのよ。それに、健ちゃんに喜んでもらえなかつたら、生まれてくる赤ん坊もかわいそうだもの」

自分の思い通りになつたにもかかわらず、清史は喜べなかつた。本当に大丈夫なのかなと思う。もし一年たつても食えなかつたら……。そんなこと、あるものか。いつもの自信はどうした、と清史は自分に言つてみる。

しかし気持は沈んだままだ。こんな時、手にギターさえあれば、吹飛ばせるんだが……。

「あした、お医者さんのところに行つてきます」とみよ子が言つた。

「別に、そんなに急がなくても……」

「おろすと決めたら、早いほうがいいんです。ぐずぐずしてたら、気が変つちやうから」

みよ子は清史が驚くほど、あつさりとした口調で言う。清史は少しほつとした。

費用は清史が出すことにした。みよ子と健次は自分達のことだからと反対したが、清史は、いや、おれが頼んだことだからと納得させた。「ほんとに大丈夫ですか」と健次は心配したが、「五万や十万の金なら、いつも都合つくさ」と清史は笑つて答えた。

健次のアパートを出たのは四時過ぎだつた。清史は由美子に、手術費用の金を借りるつもりでいるのだ。きのうのきようでは、いかにも早過ぎる気がしたが、みよ子があした医者に行くとすれば、遅くともあしたの朝、できればきよう中に金を渡しておきたい。

由美子は五時半には帰つてゐるだらうと、パチンコで時間をつぶしてから、由美子の家に電話をした。出てきたのは、由美子の母親だつた。

「あの、由美子さん、いらっしゃいますか」

「由美子はまだ帰つておりませんが、どちらさまでしようか」

「三田村という者ですが」

「三田村さん？……ああ、清史さんね。いつも由美子がお世話になつております」

「いいえ、こちらこそ、お世話になりっぱなしで……」と清史はあわてて口ごもる。

由美子の家には、今までに何回か行つたことはあるが、なるべく母親と顔を合わさないようにしているから、彼女から「清史さん」などと言われると、まごついてしまう。

「由美子から聞きましたけど、今度の日曜にコンサートをおやりになるんですつて」

「ええ、テレビ局から話がありまして」

「あら、そうしたらテレビに出るの？」

「いや、出るかどうかわかりませんけど、一応、テレビ局主催ということになつています」

「そう、いよいよ売り出しね」

まるで新製品が出るみたいな言い方である。

「変なこと、お聞きしますけど、清史さんのロツクって、難しい音楽ですの？」

「え？」

「由美子にね、わたしも行こうかしらって言つたら、お母さんにはわからないうから、やめたほうがいいつていわれました。でもビートルズもロツクですものね」

清史は、彼女の口から「ビートルズ」という言葉が出てきて、あれと思つた。

「……ビートルズ、お好きですか」

「大好きですよ。特に、あれ、何て言うのかしら……曲名は忘れちゃったけど、ほら、六十四歳になつても、愛を忘れずに、という歌があつたでしょう？」

「ファン・アイム・シックスティファイフオですか？」

「あ、それ、それ。それにミツシェルなんかも素適な曲よね。ビートルズの前はプレスリーもよく聞きました。わたしが今の由美子ぐらいのとき、ロックンロールがはやって、主人とよく聞きに行きましたのよ」

そう言えば、前に由美子から、そんな話を聞いたことがある。

「今度のコンサートには、ビートルズナンバーもいくつかやる予定ですか」

「あら、ほんと？ それなら是非行きますわ。由美子がだめだと言つても、内緒で行きますから」

そう言つて彼女は笑つた。清史はこんなふうに彼女と話すのは初めてだつたが、なかなか話せる人じやないかと思つた。今まで避けてきたのは、悪かつたような気がした。

「ごめんなさい。余計なおしゃべりをしてしまつて。由美子に何かご用だつたんでしょう」

「ええ、ちょっと……」

「伝言でよければ、しておきますよ。それとも帰つてきたら、こちらから電話をさせましようか」

「いいえ、別に大した用じやないんです。またのちほどこちらから電話をします」

受話器を置いてから、清史はふーっと溜息をついた。女友達の母親と話ををするというのは、何と言つても、気疲れのすることには違ひない。

清史はいつたんアパートへ帰り、近くで夕食をすませてから、八時頃再び電話をした。今度は由美子が出てきた。

「夕方、電話くれたんですね？」

「うん、五時半ごろだったかな。お母さんが出てきて、ちょっと話しましたよ」

「ああ、それで母ったら、今度のコンサートには絶対に行く、なんて言つてるのね」

「ビートルズ大好きだらうだから、いいんじやないの。こつちも二、三曲やる予定だから」

「そんなこと言つたの。そりや、ビートルズが好きだつてことは知つてい

るけど、お目当ては別なのよ」

「べつ？」

「そうよ。わからない？」

「ぜんぜん」

「お目当てはね」と言つて、由美子は声を落した。「あなたよ」

「おれ？ そりや一体どういう意味だい？」

「未来の婿殿はいかなる人物でありますようや」と由美子は芝居つ氣をして言う。

「えつ？」

「冗談よ。でも、母にそういう気があることは確かね」

「ほんとかなあ」

そう言いながら、清史は、なるほど、なるほどと納得していた。別にいやな気はしない。むしろ愉快な感じがする。

「それはそうと、何か用事なの？」

「うーん、ちよつと言いにくいためだけ、実は、きのう言つてたお金が急に入用になつたんだ」

「また、えらく早いのね」

「そうなんだ。悪いけど、都合つかないかなあ」

「いいわよ、あした渡すわ」

「今晚はだめ？」

「今晚？ それは無理よ。十万なんてお金、銀行に行かなきやないもの」

「だつたら、五万でもいいんだ。とにかく今晚いるんだ」

手持ちの三万と合わせて、八万なら何とかなるだろうと清史は思つた。

「どうして今晚いるの？ アンプを買うんじゃないの？」

「アンプ？」

「そうよ。きのう言つてたでしょ」

「ああ……」

清史はすっかり忘れていた。

「アンプじゃないのね」由美子の声がいやに鋭く聞こえる。清史は何と答えるべきか、いろいろ考えたが、適当な嘘が浮んでこない。ええいという

感じで、彼は本当のことを言うことにした。もつとも名前は伏せてだが。

「実を言うと、おれの友達のかみさんが妊娠してね、おろしたいって言うんだ。ところがそいつは文無しで、手術の費用なんて逆さに振つても出ないって有り様で、結局、おれのところに頼みに来たつて訳なんだ。誤解のないように念を押すけど、友達のことだよ」

由美子は受話器の向うで沈黙したまま、答えない。清史は少し不安になつて、

「アンプだなんて言つたのは、悪かつたよ。でもこんなこと、ちよつと言いくいからなあ」

しかし由美子は黙つたままだ。清史も相手の答えを待つて、黙り込む。やがて由美子が静かな口調で言つた。

「それ、ひよつとしたら、みよ子さんのことじやない？」

清史はびっくりした。そしてあまりにもずばりだったので、彼は否定することなど考えもしないで、思わず、「あれ、どうして知つてるの？」と言つてしまつた。

「やつぱりね」由美子はつぶやくように言う。「きのうね、フイニーと一緒に彼女の働いている喫茶店へ行つたのよ。そうしたら彼女、休んでいて、そこで働いている女の子が、彼女、妊娠らしいつて教えてくれたのよ」

「ふーん、そうか。それにしてもよくわかつたなあ」

「何となく、ピンと来たのよ」

それなら、かえつて話しやすいや、と清史は気軽な調子で、「実は、みよちゃんがあした病院に行くつていうもんだから、きょう中に金を渡そうと思つて……」

「わたし、みよ子さんに会つてみるわ」

清史の言うことなど聞いていない感じで、由美子が言つた。

え？ 清史は脳天に一撃を食らつた気がした。

「どうして会うの？」答えはわかっていたが、万が一という期待で、彼は尋ねた。

「何、言つてるの。もちろん思いとどまらせたためじやないの。あなたもあなたよ。どうして止めないの。二人は別に赤ちゃんを生んだらいけない

つていう関係じやなし……」

「でも同棲だから……」清史は小声で言つてみる。

「同棲だからどうだつて言うの。むしろいいことじやない。赤ちゃんが出てきたから、正式に結婚するということになるでしょ」

由美子の剣幕に持されて、清史は何も言うことが出来ない。

「何も、あなたと言い争つても仕方がないのよね。だから、わたし、健次くんのアパートに行くわ。つれていつてくれるでしよう？」

「今から？」

「そうよ。だつて、みよ子さん、あした病院へ行くんでしょう」

「何も今晚でなくとも、あしたでもいいじやないか」

「変な人ねえ。お金なら今晚で、説得ならあしただなんて。あなたがいやだつたら、わたし、保男くんに電話をして、健次くんのアパートの場所を聞くわよ」

保男なんかに知られたら、余計にまずくなるので、清史はしぶしぶ承知した。待合せの場所を決めて、受話器を置く。その受話器を再び取上げて、彼は健次のところに電話をしようとしたが、やめた。今から由美子と一緒に行くから適当に話を合わせてくれるようになんておこうと思つたのだが、そんな小細工をすることに嫌気がさした。

駅の改札口で待つていると、ピンクのカーデイガンを着た由美子が出てきた。二人は並んで歩き始める。

「ここから歩いて遠いの？」

「歩いて十分くらいかな」

由美子はそれから、「みよ子さんの妊娠、いつわかつたの？」「どうしておろすなんて言つてるの？」「今の演奏活動じや、赤ん坊ができたら食べていけないの？」「でももう大丈夫じやないの？」今度のコンサートで実力が認められたら、もっと仕事がくるんでしょう？」「もしだめだつても、赤ちゃんの一人くらい育てられるはずよね？」などと矢継早やに質問するが、清史はそれに、「ちょっと前」「わからない」「今はだめだね」「さあ」などと答えるだけで会話にならない。自然、由美子も黙りがちになり、そ

のうち、案内しようとする清史の足が速くなつて、二人の間が離れてしまう。暗い四つ角を曲つたところで、由美子が「ちよつと待つて」と走つてくる。

「何だか、わたしが行くのが気にいらぬみたいね」

すばり言い当てられて、清史の頭はかつと熱くなる。

「そんなことないさ」とからうじて答えたが、いつそのこと、このまま由美子をまいてしまおうか、などと思つてみる。

健次のアパートに着いたとき、清史は、今度こそ本当のことを言つてしまおうと思つたが、結局できないま、健次の部屋の扉を叩くことになつた。「はーい」と言つて、みよ子が出てきた。

「あら、キヤツップさん。それに先生も。どうしたんですか、今頃」「ちよつと上がつてもいいかしら」と由美子が中を覗き込むようにして言う。

「ええ、どうぞ」

中に上ると、健次が訝しげな顔で二人を迎えた。清史と由美子は、みよ子の出してくれたクッショングリーンみたいな座ぶとんに坐つた。みよ子が「お茶でも」と言つて、流しに行こうとするのを、「お茶なんかいいから、みよ子さんも坐つて」と由美子がとめた。健次が清史に何か聞きたそうな顔をし、清史は、つまりこういう訳なんだというようにつまづいた。

「みよ子さん、妊娠したつてほんとう？」

由美子が明るい声で聞く。みよ子はちよつと戸惑つた表情を見せながら、うなずく。

「それじやあ、中絶するつていうのも本当なのね」

みよ子は、今度ははつきりと首を縦に振る。

「どうして。赤ちゃん、嫌いなの？」

「いいえ、そんな……」

言つてからみよ子は苦しそうな顔をして、清史を見、それからうつむいてしまつた。

「今のぼくらには、子供は無理なんです」

健次が横から強い口調で言つた。

「それは食べていいってどういう意味？」

由美子は穏やかに尋ねる。

「とにかく無理なんです」

おれのことは一切言わないつもりだなと思うと、清史は黙つていられなくなる。こういうことは苦手なんだな、おれ、と自分に言つてから、「もういい、もういい、おれが言うよ」と清史は右手を上げた。由美子も健次も清史の方を見る。

「実は、おれが頼んだんだ、中絶のこと」

そして、清史は洗いざらいしゃべった。途中で健次が何か言おうとするのを遮つて、一気に話した。由美子は聞き終つてからも、しばらく黙つていたが、やがて、

「そんなことだろうと思つたわ」と静かに言う。納得したのかなと清史は思つたが、そうではなかつた。

「みよ子さん」と由美子はうつむいているみよ子に声をかけた。「あなた、子供を絶対におろしちゃダメよ。こんな男共の言うことを聞いちやだめ」

清史はむつとしたが、言われても仕方がないので、黙つていた。由美子は、なおも顔を上げないみよ子のそばへ行くと、彼女の肩を横から抱くようにして、「赤ちゃん、初めてなんでしょ」と耳許でささやく。みよ子はあごを胸に埋めるくらい深くうなづく。

「赤ちゃん、欲しいのよね」

みよ子はまたうなづく。

「だつたら、体に気をつけて、栄養のあるものを一杯食べて、丈夫な赤ちゃんを生まなきやね。健次くんはね、まだピンとこないのよ。だから頼りないことを言つてるけど、でもそのうち……」

みよ子が肩を震わせて泣き始めた。由美子が背中をさすると、みよ子は崩れるようにして、由美子の膝の上に顔を埋めた。由美子は彼女の髪をなでながら、顔を上げて清史を見た。清史は思わず視線をそらしてしまう。「これでも、あなた、中絶を勧める気？」

清史は答えない。言いたいことが山ほどありそうで、しかし何をどう言つたらしいのかわからない。

「ほんとにわたし、がっかりしたわ。あなたがそんなに自分中心の考え方をするなんて。なんのためにここまでやってきたのかわからないわ」

体が熱くなり、頭の中にはいろいろな思いが渦巻くが、言葉が出てこない。清史は由美子をにらみつけ、由美子もにらみ返す。しかし由美子の勢いに負けて、彼は目をみよ子に向かた。みよ子はまだ泣いている。

「健次くんも健次くんよ。どうしてあなたまで、こんな人と一緒になつて、みよ子さんを苦しめるの。もし中絶して、みよ子さんが一生子供を生めない体になつたら、どうするの」

健次はもううつむいてしまっている。清史は、「こんな人」と言われて、頭にかつと血が上り、思わず立上がりてしまった。心臓の鼓動が耳の奥で聞こえる。

「どうしたの？」

「おれ、帰るよ」清史は言葉が震えそうになるのを押えて言つた。

「逃げるのね」

「何とでも言えよ」

清史は急いで靴をはくと、部屋を飛出した。

彼は走った。マラソンランナーのように正確な足取りで。夜の冷気が熱くなつた体から熱を奪っていく。その快さにひかれるように、彼は夜の道を走り続けた。そして、水銀灯がひとつだけついている小さな公園を見つけると、その中に入つて、ベンチに腰を降ろした。両膝に肘を置いて、息を整える。呼吸がおさまつてくると、由美子の言葉がよみがえり、清史は、もうひとつ走りと腰を上げた。そのとき、野球のバットが落ちているのを見つけた。子供用だ。彼はそれを拾い上げて、二、三回素振りをした。軽いので手応えがない。清史はふと思いついて、それをギターに見たてて、腰に当てた。弦をはじく真似をする。頭の中で音が鳴つた。彼はヘビヨンド・ザ・ホライズンの独奏部分をひいてみた。練習ではどうしてもうまくいかないところも、難なくこなしてしまう。彼はおもしろくなつて、それから知つてゐる曲を次々に演奏していく。みよ子の赤ん坊のことも、由美子の言葉も次第に遠去かつていき、エレキギターの音だけが頭の中で鳴り続けた。

清史は次の日、部屋に閉じこもつて、オリジナル曲を立て続けに作つた。きのうの晩、帰つてからも、公園での高揚した気分が残つていて眠られず、夜中の三時頃まで、ヘッドホーンを使ってエレキギターを弾いたのだった。健次のスカウトのことやみよ子の妊娠のことはどう考えたかと言うと、もうそんなことはどうでもよくなつたのだ。バンドが解散になるならなつたでいい。今度のコンサートでパツと花火でも上げて、また始めからやり直せばいい、と気楽に考へることにしたのである。ギターさえあれば、どんな風にしても食つていける、と自分でも少々きざつぽいとは思いながらも、それが実感だつた。

ただ、ひとつだけ残念に思つているのは、由美子とあんなふうにおかしくなつてしまつたことだつた。確かに後から考へてみると、由美子がああ言うのも無理のないことだつたが、もう少しioreの気持もわかつてくれてもよさそうなものだと清史は思うのだ。だから由美子に電話をして、きのうの一件をあつさりと謝つてしまおうという気持はあつても、一方では、何もあいつに謝る必要はない。だいたい言い過ぎたのはあいつなんだから、と居直る気分もある。エゴイストと決めつけられたことが、清史にはこたえていた。

次の日は練習日に当つていた。清史は車を運転して、いつものように駅前で健次をひろつた。清史は健次の方から何か言つてくるだらうと思つて、しばらく黙つていたが、健次は何か考へごとをするようになんやりとしているので、しびれを切らして、赤信号で止つたとき、清史の方から口を開いた。

「それで結局、生むことにしたのか」

「昨日のことなどなかつたように、あつさりときく。

「ええ」

「だらうな。あんな風に騒ぎたてる人がいたら、おちおち子供もおろせやしないからなあ」

健次が小さく笑った。

「おとといは悪かったよ、ほんとに。おれって、カーッときたら、一つのものしか見えなくなつちまうから、だめなんだな。みよちゃんには本当に申し訳ないつて思つてるよ。おまえからも、おれが謝つてたつて言つといてくれよな」

「いや、だめなのはぼくの方なんです」

健次はいやに思いつめた口調で言う。清史は、健次にこういうことを言わせる由美子にちょっと腹を立てた。

「いいの、いいの、そんなこと。それよりもこれからのことを考えようぜ。おまえは父親になつて、ますますいい仕事をする。おれも一から出直して、がんばる。そういうわけだ」

「すいません」

「何もあやまることはないさ。おれはもう悟りを開いてるんだから、何が起ろうとへっちゃらだ。でも、今度のコンサートがすむまでは、一緒にいてくれよな」

「そりや、もちろん」

青信号になる前に、清史は座席の後ろのドラムの入つた黒いケースの間から紙袋を取つて、健次に渡した。きのう作つた曲の譜面が入つているのだ。

「これは？」と譜面を取出した健次が言つた。

「きのうちよつとひらめいて、作つたんだ。最後ぐらいましのオリジナルでばしつと決めたいからな」

健次はさつきまでの元気のなさが嘘みたいに、熱心に譜面を目で追う。保男と隆正は例によつてまだスタジオに姿を見せていなかつた。しかし清史はすでに悟りを開いているから、全く腹が立たないのである。二人はアンプとドラムを運んで、早速、きのう清史の作つた曲を検討し始めた。少したつて、隆正がフィニーをつれて入つてきた。

「おまえ、まだこいつと一緒にいるのか」

隆正是顔をしかめて、額に手を当てる。

「キャップ、大きな声を出さないでよ」

「何だ、二日酔か」

「二晩、こいつと飲みっぱなし」

隆正のギターケースを下げたフイニーは、日本語がわかるみたいに、笑つて「人のやりとりを聞いている。

「おれ、とても練習できそうもないから、管理人のおっちゃんのところで、しばらく休んでいてもいいでしょ。見たところ、保男も来てないようだし……」

清史はむかつとして、思わず怒鳴りつけようとしたが、やめた。悟り、悟り、と口の中でつぶやく。

「好きなだけ、休んでこい。しかし、あしたまでにおれの作った曲、マスターしなかつたら、ぶつとばすからな」

悟っていても、このくらいは言うのである。隆正是ちょっぴり目を輝かせて、

「あれ、オリジナル作ったんですか。そりやまた久し振りな。どんなのか見たいけど、今はだめ、今は休むほうがさき」

最後は独り言みたいに言つて、隆正は頭を押えながら出ていく。残されたフイニーは戸惑った表情で、ギターケースを持上げてみせた。「そのへんに置いとけよ」と日本語で言つて、清史は部屋の隅を指さした。

再び、健次とオリジナル曲を検討しようとしたが、所在なさそうにしているフイニーが、何とも目ざわりなのである。いつそのこと、三人で演奏しながら直そうかと清史は思った。健次にきくと、彼もその方がいいと言つう。

「フイニー」と清史は手招きをした。壁にもたれていたフイニーが、にこにこしながらやってくる。

「おれの作った曲、一緒にやつてみないか」

健次に通訳させると、フイニーは驚いた顔をして、早口で何か言う。わからぬけれど、清史はふんふんとうなずいて、譜面のコピーを渡した。フイニーは頭でリズムを取りながら、曲を追つていく。

「オーケー?」ときくと、フイニーは右手の親指を立てて、「イエス⋮⋮」と言つた。

清史は管理人室へ行つた。針金でピアノの鍵を開ける特技を持つてゐるのは隆正だけなのだ。

隆正是眼の上に折りたたんだタオルをのせ、古ぼけたソファーの上に横になつていた。管理人はイヤホンを使つて、テレビを見ている。

「おっちゃん、悪いなあ」と清史が声をかけると、管理人は驚いて振返り、清史を認めるに、耳からイヤホンをはずした。

「そんなことは構わないが」と管理人は言い、フイニーのことを尋ねた。

清史は、今度のコンサートでキーボードをやつてもらう予定だとたらめを言い、詳しい話は避けた。

隆正の眼の上の濡れタオルをめくると、彼はまぶしそうに片目だけ開けた。清史が手で鍵を開ける真似をして見せると、隆正は「あ、だめ、だめ」と言つて目をつむり、清史の手からタオルを取ろうとした。清史がはなさないでいると、「この頭じや無理ですよ」と情けない声を出し、それから急に目を開けると、管理人の方に顔を向けて、「おっちゃん、ピアノの鍵ある?」とあつさりと言う。あ、馬鹿と思ったが、もう遅い。

「ピアノがいるのか」

「悪いけど、鍵をキヤップに渡してやつて」

「いや、金がないから、きようはいいや」と清史はあわてて言つた。管理人は机のひき出しから、鍵を取り出し、「まあ、出世払いつてことで、きようはいいよ」と清史に手渡した。清史たちが無断でピアノを使つてゐるのを管理人が見て見ない振りをしていることは、清史も気づいていた。おっちゃんの期待に応えられそうもないな、そう思うと、清史はちょっと寂しい気がした。

譜面にはキーボードのスコアが書いてなかつたので、フイニーと清史は相談しながら、ごく大雑把に一曲だけ書いて、早速、演奏してみた。ヘルダム通り√と名付けた曲で、清史の一番気に入つてゐるやつだ。メロディラインは沈んだ感じで、全体として重いのは彼の好みである。演奏していくつて、うまくないと思ったところはすぐに直していく。特に、フイニーは度々演奏をストップさせて、その止めた部分の前からやり直して、譜面に書き込みをする。そうやって、二、三回演奏するうちに、曲が大体まとま

つてくる。

昼前になつて、ようやく保男が姿を見せた。ところが彼はギターを持つてきていないので。

「ギター、どうした?」

「実は、女の子に取られたんです」

ばつが悪そうに保男は答える。清史はあきれで、怒る氣にもなれない。土曜日の夜に寝た女の子につきまとわれたためだという。

「それは無理矢理やつた子か」

「ええ」

喫茶店ですきを見て、逃げ出したまではよかつたが、ギターを置き忘れてしまい、戻つてみると、その女の子が胸に抱えて保男の現われるのを待つていたというのだ。それで保男は見つからぬないように、また店を出ただ。

清史は聞いていて、だんだん腹が立つてきて、「今すぐ行つて、取り戻してこい」と怒鳴りつけてしまつた。

「キヤツプも一緒に来てよ」

「馬鹿野郎!」

保男はあわてて飛出していく。ほんとにどいつもこいつも勝手ばつかりしやがつて。清史は、解散だ、解散だと心の中で叫んで、少しばかりうつぶんを晴らした。

保男が帰つてきたら、昼めしにしようと思っていたが、彼はなかなか帰つて来ず、一時間ばかりして、小さくドアが開いたと思ったら、保男が顔をのぞかせた。

「ギター、取返してきたか」

「ええ、まあ」

しかし、中に入ってきた保男は何も持つていなかつた。

「おまえ、ギターは?」

それには答えず、保男はドアの外に向つて強く手招きをする。「入つてこいよ」

恐る恐るという感じで入つてきたのは、まだ高校生じゃないかと思われ

るほど子供っぽい顔の女の子だつた。黒いギターケースを抱えたまま、ぴょこんとお辞儀をする。つられて頭を下げた清史はじつとその女の子を見てから、フィニーのそばを離れ、保男たちのところへ行つた。

「ほら、これでわかつただろう。だからギター返せよ」
そう言つて、女の子からギターケースを受取つた保男を、清史は隅の方へ引張つていつた。

「おまえ、あの子まだ高校生じやないのか」

「今年卒業したつて言つてましたよ」

「ほんとか」

「本人が言つてるから、確かでしょ」

保男はすましたものである。清史は、グループの品位を落すようなことはするなよと言おうとしてやめた。もうすぐ解散なのだ。

女の子は珍らしそうにフィニーを見、彼が片手を上げて、指を前後に交差させるよう振ると、につこり笑つて同じように指を振る。フィニーはその女の子を由美子と同じような人間だと思つてゐるらしかつた。

隆正を起して、清史たちは隣のビルの食堂へ行つた。女の子は清史たちの後について、スタジオから出てきたが、そのままどこかへ行つてしまつた。帰つたんだなと清史は思つたが、そうではなかつた。食事から帰つてみると、スタジオのドアのそばにぱつんと立つていたから。
「まだいたのか。もういい加減に帰れよ」

保男が不機嫌そうに言う。女の子は頬をふくらまして、うつむき、小石か何かをける真似をする。清史はちよつと保男をいじめたくなつて、「まあいいじやないか。この子もおれたちのお客さんには違ひないし、将来LPレコードを買ってくれるかも知れないんだから、大事にしなきや」「そんな。おれ、気が散つちやうよ」

保男の言葉は無視して、清史は鍵を回してドアを開け、女の子を真つ先に入れた。

「あたし、邪魔しないように、ここに坐つてまあす」

そう言つて、女の子は壁際のパイプ椅子に腰を降ろした。
「きみ、何て名前？」と清史がきく。

「わたなべちかこ」

「高校生？」

「ううん、今、洋裁学校へ行つてゐるの」

「あのね」と清史は後ろでギターを取出してゐる保男を指さした。「あなやつと付き合つちやだめだよ。あいつに泣かされた女の子はどまんといるんだから」

「はーい」女の子は聞分けのいい生徒みたいに元気よく答えて、後ろの保男に笑いかけた。

「そりやないよ、キヤップ」と保男が情けない声を出した。

ようやく一日酔のさめた隆正が、保男に「あの女の子、一体誰なんだい?」ときく。保男は「ただのファンだよ」ととぼけるが、隆正は納得せず、清史に同じことをきく。

「キヤップ、だめですよ、言っちゃ」

しかし清史は全部しやべつてしまつた。

「あれ、まあ」と言つて隆正は保男を見、それから、壁際に坐つてゐる女の子に目をやつた。そして急に笑い出した。

「ばか、笑うな」と保男が言うが、隆正は笑うのをやめない。

清史はオリジナル曲の譜面を保男と隆正に渡すまえに、健次のゼッド入りのことを話し、今度のコンサートで一応グループを解散すると告げた。「別に解散しなくとも、ドラムスくらいおれがつれてきますよ」

保男が不満そうに言う。

「ケンよりうまいやつが、おれたちみたいなグループにくると思うのか。

そんなやつは、とつくにもつと売れてるグループに入つてるさ」

「そりやそうかも知れないけれど、へたなやつでも一年くらい一緒にやつたら何とかなるんじやない?」

おれは健次以外のドラムと一緒にやるつもりは今のところないんだ。そういう言おうとして、清史は口をつぐんだ。健次がつらそうな顔をしていたからだ。

「まあ、その話はコンサートが終つてから、ゆっくりとしたらしい。とにかくきょうは、おれの作った曲をばつちりと練習するぞ」

譜面を受取つた隆正と保男は、譜面を目で追い、時々、「やるう」とか「なるほど、なるほど」と声を出す。

練習を始めようとしたとき、清史はあることを思いついて、隆正に「フイニーはいつまで日本にいるんだ」と尋ねた。管理人に言つた通り、フイニーにキーボードをさせようと思ったのだ。隆正は「さあ」と首を傾げるばかりなので、今度は健次に「いつまで日本にいるのかきいてみてくれ」と言つた。健次が英語で尋ねる。

「今度の月曜日の午前五時の船に乗るつて

「横浜か」

健次がまた尋ね、「東京港だつて」と言う。こいつはちようどいいや。清史はうれしくなつた。

「ちよつとみんな聞いてくれ」と彼は改まつた口調になつた。「おれは今度のコンサートに、フイニーをキーボードとして入れようと思うんだけど、どう、だろう」

「それは無理ですよ。そんなに急に」と保男が言つた。

「この前はうまくいったじやないか」清史は『無常』でのことをさして言う。

「それはフイニーがビートルズナンバーを知つていたから」と今度は隆正が言う。

「だつたら、ビートルズとおれの曲だけでもフイニーを入れるといふのはどうだ」

「それなら別に構わないけど、でも初めてのコンサートに他の人間が入るつていうのも、どうかなあ」

「最初で、しかも最後のコンサートなんだ。おればばあつとやりたいんだ」

その言葉で決まつてしまつた。フイニーに、いいかどうかきくと、「喜んで」と答えたから、清史はますますうれしくなつた。

清史はオリジナル曲を四曲つくつたのだが、保男はそのうちへこの世をバラ色の眼鏡で眺めてみても▽という長いタイトルの曲をベストワンに選

んだ。女の子にふられ、雨に降られ、びしょびしょになつた靴をひきずつて地下街に逃げ込んだ男の様子をユーモラスに歌つた曲だ。

清史の一番気に入つてゐる△ランダム通り▽は「最もいただけない曲」だつた。清史はおもしろくないから、隆正と健次にも評価を求めた。ベストワンは二人とも保男と同じで、△ランダム通り▽は隆正が三位、健次が二位だつた。清史はそれでもおもしろくなくて、フイニーにもきいた。フイニーは譜面を見て、しばらく考えてから、保男が第二位に推した△グッバイ・リバーヴが一番いいと答え、△ランダム通り▽もいいと言つた。「フイニーはダメですよ、日本語がわからないんだから。バラ色の眼鏡は歌詞がおもしろいんですよ」と保男が言う。

それならと清史は、パイプ椅子に坐つてゐる女の子を呼んだ。女の子は一瞬びっくりした顔をし、それから急に、にこにこ顔になつてやつてくる。「今までやつた曲の中で、どれが一番よかつた?」

女の子は天井に目をやつて、ちよつと考えてから、

「どれもみんなよかつたわ」と答えた。

「それじやだめだ。どれがベストかつてきいてるんだ」

横から保男が口を出す。女の子は口をとがらせてふくれつ面をして見せるが、すぐに、

「バックスキンの靴がびしょ濡れで、おもりを引きずつてゐるよう、という曲が一番おもしろかつたみたい」

「ほら、おれの言つた通りでしょ」と保男が勝ち誇つたように言う。清史はおもしろくなかったが、ベストワンが△バラ色の眼鏡▽であることだけは認めざるを得なかつた。

そのことは次の日の『無常』でのステージでも実証された。清史たちが四曲を通して演奏してから、アンコールを求めるとき、△この世をバラ色の△▽が一番多かつた。清史を喜ばせたのは、△ランダム通り▽も結構アンコールがあつたことだつた。

清史は演奏しながら客席を見回し、由美子が来ていないかと探したが、いなかつた。その代り、この前のスカウトが一番前の端つこの席におり、清史と目が合うと、やあというように手を上げた。おまえなんかに用はな

いんだよ、と清史は胸の中で毒づいて、弦に指を叩きつけた。

土曜日の練習は、さすがに熱が入っていた。隆正も保男も久し振りに定刻にスタジオにやってきた。もつともきのう『無常』のステージが終ったあと、清史が釘を刺したこともあったからだが。

コンサートは、清史たちのバンドと、大阪から来るバンドのジョイント形式で行なわれ、清史たちの持ち時間は一時間半である。清史はオリジナル曲を含めて、十二、三曲演奏する予定でいる。ファイニーをキーボードとして入れるのは、ビートルズナンバーとオリジナル曲のうちの新しい四曲である。きょうは、△この世をバラ色の……▽等四曲の仕上げと、ファイニーのピアノとの合わせが主な練習だつた。

四時頃、由美子が少年をつれて、スタジオに入ってきた。少年はギターを下げている。

清史はそのとき練習中だったが、由美子を見てどきりとした。しかしもちろん顔には出さず、小さく手を振った由美子にうなずいただけで、そのまま演奏を続けた。

終つて、保男にちよつとした注意を与えてから、清史は由美子たちのところへ行つた。この前のことはみんな忘れたよというように、さり気なく近づいていったが、いざ由美子と対面すると、うまく言葉が出てこない。由美子も保男たちの方に笑いかけたりして、なかなか口を開かない。少年は珍らしそうに首を回して、スタジオの中を見ている。

「先生、きようは差入れ、ないの？」と保男が声をかけた。

「ごめんなさい。きようはないのよ。でも、あしたどつさり持つてくるから、いいでしょ」

「あしたよりもきようのほうがよかつたなあ。今までね、キヤップにバツチリしごかれてたから、腹が減つて、腹が減つて」

保男が冗談とも本気ともつかない口調で言う。

「バカヤロウ。この前、ろくに練習できなかつたのは誰のせいなんだ」と清史もやり返して、ようやくいつもの感じが戻つてくる。

「それで、きようは一体どうしたんだ？」と少年に目をやりながら由美子

にきいた。

「この子がね」と由美子は少年の肩に手をやつた。「プロの練習ってどんなのか見てみたいっていうから、つれてきたのよ」

少年は緊張した面持ちで清史を見ている。清史はプロと言われて、ちょっと恥ずかしかった。それで食えない者はプロジェクトやないと思うし、ましてやあした解散するのだから。

「教え子?」

「ええ、頭はいい子なんだけど、ギターばっかりやつていて勉強しないでしょ。だからわたしも困つてるので。本人はエスカレーター式に大学に行ける高校に行くから気にしないって言つてるけど」

「そんなことはいいよ、先生」少年が非難と甘えの入り混つた口調で言う。

「学校でバンド作つてるのか」と清史がきく。

「夏休みまでは作つてたけど、今はなし。みんな勉強のほうにいつちやつたから」

保男たちも集つてきて、少年にいろいろと尋ねた。少年のバンドがツェッペリンをやつていたとわかると、保男は、おおつと驚いた。

「おれたち、ヤードバーズをやつているんだぜ」

「ほんとですか」少年は目を輝かす。

「せつかくギター持つてきたんだから、ひとつ、おれたちと一緒にやつてみるか」

清史は少年の目の輝きに、ついそう言つてしまふ。

「ほんと? わあ、やつた」と少年は指を鳴らす。

「ツェッペリンだつたら、ヘュー・シェック・ミーヴは知つてるか」「もちろん」

「よし決まつた」

少年は急いでケースを開けて、ギターを取出した。それを見て、清史は驚いた。フエンダーのストラトキャスターなのだ。安いやつでも二十万円以上はする。清史はいさかがつかりした。中学生の持ち物にしては不釣合だということもあつたが、こういう物を親に買ってもらうということが（そうに違ひない）気に入らないのだ。

清史が中学生の頃は、学校に無断でアルバイトに行き、そのためた金で、二万円のギターを買ったものだった。そのときの喜びを、今でも覚えているし、そのギターは、まだ彼の実家にある。

「フェンダーか」隆正が驚いた声を出す。

「おまえの家、金持なんだなあ」保男がネックに手を触れながら言う。少年は由美子と目を合わせて、意味ありげに笑っている。

「そうじやないのよ」と由美子が口を聞いた。

「これはね、この子が自分でかせいいだお金で買ったのよ」「まさかあ」

由美子の説明によると、この少年はいろいろなクイズ番組の中学生大会に片っ端から出場して、賞金や賞品をかせぎ、賞品は金に替えて、二十二万円ためたのだ。

少年はクイズの番組名を次々とあげていき、保男たちは「あ、それ知ってる」と歓声を上げた。時代が変ったのかなあと妙な感心の仕方をしながら、清史は少年を眺めた。

少年はリードギターをやつているので、清史の代りに保男たちに加わって、ヘュー・シュック・ミーヴを演奏した。なかなか達者なものだった。中学生としてはテクニックは抜群のほうじやないかなと清史は感心した。しかしコピーチitarを忠実に追うのに精一杯で、迫力とか雰囲気をどう盛上げて、どう聞かすかという点になると(当り前の話だが)まだまだだった。保男がヴォーカルを受持つたが、ギターとのかけあいの部分がうまくいかなくて、幾分戸惑っているようだつた。

終つて、真っ先にフィニーが大きな手でゆっくりと拍手をした。清史と由美子もすぐに手を叩いた。保男と隆正が「たいしたもんだよ」「フェンダー持つてるだけのことはあるな」と言い、少年に、ソロの部分はもつと力いっぱいピッキングしたほうがいいなどと、プロみたいな顔をして教えている。

フィニーが、ナイスボーイとか何とか言って、隣の由美子に話しかけ、清史は横目でその様子を見てから、少年のところへいった。少年は額に汗を浮べており、清史が近づくと、ありがとうございましたと言つて礼をしている。

た。

清史は面映ゆいのを笑いでごまかしながら、「それじやあ、今度はおれがやろう」

「キヤツプ、かつこいい」保男がひやかす。

清史の演奏は少年のブルース調とは違つて、よりロックの色彩が強い。それに聞かせどころというのを心得ていて、雰囲気を盛上げていくから、無理な感じがしないのである。保男たちとの息がうまく合っているせいもあるが。

「やっぱり、プロですね」と少年が演奏の終った清史のところにきて、興奮した声で言つた。清史はうれしいというよりも、正直言つてホツとした。そして少年の質問に答えて、スライド奏法のちょっとしたテクニックとコードの使い方などを教え、基礎練習の重要性を強調した。

由美子がそばに来て、ささやくように言う。

「あの子のあんな真剣な顔、初めて見たわ。あなたの言うことなら何でもききそうちだから、勉強するように言つてよ」

「だめだよ。おれ自身、勉強なんかしなかつたんだから、人に言えるわけないじやないか」

それから一時間ばかり練習して、清史たちはスタジオを出た。清史は車に健次と由美子をのせ、最初に健次をアパートの近くまで送つた。そしていつたん清史のアパートへ寄つて、整理券を十枚ほど取つてきて、それを由美子に渡した。入場無料のコンサートなので、到着順に整理券を配つて入場させるのだ。清史はあらかじめ、三十枚ばかりもらつている。

「整理券なんか、ほんとはいらないんだけどね」と車を発車させながら、清史は言つた。

「いやに弱気じやない」

「弱気も何も、それが現実だからね」

車が国道に出てから、しばらくたつて由美子がぽつりと言つた。

「解散するつてほんと?」

「誰にきいた?」

「みよ子さん」

「……ああ、ほんとだよ」

「健次くんが抜けるから？」

「まあね。保男やリュウには悪いけど、当分は一人でやっていくことにしたんだ」

「そう」

信号待ちで止つたとき、清史は「あ、そうそう、借金のことだけど……」と由美子のほうを向いた。

「そんなもの、いつでもいいのよ」

「いや、そうはいかないさ。まずこの車を売れば半分くらいは返せると思うから、残りは月払いで頬みたいんだ」

「何もそんなに急がなくともいいじゃないの」

「いや、一から出直すつもりでいるから、ここらできれいさっぱりとしておきたいんだ」

「そう。……それなら仕方がないわね」

「返すと言つてるのに、仕方がないはないだろう」

由美子がゆつくりと微笑んだ。

二時過ぎに清史たちはコンサート会場のKホールに着いた。ステージ用のアンプやスピーカーはテレビ局が用意してくれるので、清史はドラムとギター全部を車に積み、保男たちをタクシーに乗せて、一緒に来たのだ。ギターを取られたなどと言わせないために。

ホールの正面入口には、「KTBサンデーコンサート」と書かれた看板が立てかけられており、その文字の横に、「出演 阿呂夢・ガリバー」の文字が見える。開演は六時半となつていて。

清史たちは看板を見るために、正面入口まで出てきた。

「おれたちの名前があとというのは気に入らないな」と保男が言う。健次はフイニーに看板について説明している。

「出演順に書いてあるんだろ」と隆正は別に気にするふうでもない。

「あーあ、この名前をせめて一回でもテレビの番組欄で見たかつたなあ」

保男がガリバーの文字の周囲を指でなぞりながら言う。

「それはひよつとしたら、実現するかも知れないな」と清史が言う。

「ほんとですか?」

「ああ、ビデオ撮りされるはずだからな」

「あれ、キヤップ、そんなこと一言も言わなかつたじやないですか」

「ただし、放送するのは番組にどうしても空きができた場合というわけだ」

それともう一つ、きみたちのバンドが売れたときだ、とプロデューサーは笑いながら言つたのだつた。

「なんだ、がっかりさせるなあ」

「それでも、おれたちの姿がビデオに残るんだから、張りきらなくつちや」と隆正が言つた。

ステージには大出力のアンプやスピーカーがいくつも運び込まれ、両脇と真中に配置されている。真中のアンプ群の右横に一段高くなつた移動舞台があり、ドラムをセットするところになつてゐる。電気ピアノも運び込まれ、アンプ群をドラムとはさみ込むような位置に置かれている。ピアノは阿呂夢のために用意されたものだが、清史たちも使うのである。その他照明やマイクのセッティングをする人々が舞台の上を動き回り、配線のことで怒鳴り合つたりするのを、清史はひとりで、客席の真中あたりに立て見ていた。客がいないせいか、妙に寂しい感じがする。

しばらくして、ステージの端からディレクターが清史を呼んだ。通路を通つて舞台に上ると、ディレクターは清史を舞台の袖につれていいき、阿呂夢のリーダーに紹介した。顔の下半分がひげだらけで二メートルもあるかと思われるほど髪を長く伸ばした男である。清史はそのひげ男と握手をしたが、その風貌にちょっと圧倒された。ディレクターはリハーサルの時間について相談してから、舞台のほうに戻つていつた。

「おたく、『無常』に出てはるんやて」とひげ男が気軽に話しかけてくる。清史は大阪弁に少し戸惑いを感じながら、

『無常』知つてるの?」

「大阪でもちよいちよい噂聞きますよ。サイドバイサイドや、人丸てつぱいのバンドが『無常』から出たというのは有名な話やからね」

清史は阿呂夢が関西ロックフェスティバルから出たバンドだということしか知らない。

「おたくのキーボード、黒人やね。さつき控え室に挨拶に行つてびっくりしたわ」

「まあね」

それから二人はお互のサウンドについて話し、清史はロックフェスティバルのことをきいた。関西ではその種の催しがけつこう盛んらしい。

「それでも、おれたちのバンドが先に演奏するんで助かつたわ。おたくに強烈なやつをイツパツやられたら、やりにくくて仕様がないもんね」

それは清史の不安でもあつた。しかしひげ男がそういうことを言うのは、逆に考えれば彼等にも自信がないわけで、清史は幾分安心した。

リハーサルは出演順どおり、阿呂夢が先だつた。「ちょっと見てくる」と清史が立上がると、保男たちも行くと言い、そろつて客席に回り、思い思いの席に腰をかけた。テレビカメラも客席の真中と右前方に備えつけられている。

阿呂夢のヴォーカルはあのひげ男だつた。喉の奥から振り絞るような声を出す。清史の聞いたことのない曲で、オリジナルらしかつた。ドラムの安定度や力強さは、健次の方が数段上だな。リードギターは早弾きに難点があるようだし、アタッチメントを多用している割には音がもうひとつ面白くない・。

しかし清史はこのバンドが個性というか、確かに音楽的な主張を持つていることは認めざるを得なかつた。そして、その個性のかなりの部分をあのひげ男が作り出していることは間違いなかつた。ここにも一人頑張つているやつがいるな。そう思うと、清史は対抗意識とともに妙に親しみを感じるのだつた。

アンプのチューニングや照明のタイミング、カメラテスト、ヴォーカルとのバランスなどのリハーサルが終つて、清史たちが控え室に戻つたとき、由美子がノックして入つてきた。大きな紙袋を下げている。差入れはちよつと早いんじやないかと思つたが、そうではなかつた。由美子は清史たちの衣裳として、デニムのベストを持つてきたのだ。胸に大きなGの文字の

刺繡が入っている。

「さすが、先生、よく気がつくなあ」隆正が感心したように言つた。
「ほんとはね、背中にガリバーって入れようと思つたんだけど、解散したら着れないでしょ。でもこれなら着れると思つて」

早速、清史たちはベストを着た。ジーンズにシャツスタイルという服装に由美子が合わせたのだった。フイニーのはLサイズだったが、胸幅が大きいので、少し窮屈なようだつた。しかしどうせボタンは留めないので、腕の動きには影響はない。

「おふくろさんは？」と清史がきく。

「もちろん、一緒よ」由美子は微笑し、それから、ベストを着て恰好をつけている保男や隆正に、「それじやあ、頑張つてね」と声をかけた。

「がんばります」保男がはしゃいだ声を出す。由美子は笑いながらドアを開け、そして出る前に清史のほうを見た。清史は小さくうなずいた。

阿呂夢の演奏が始まる。控え室にもギターの音が聞こえてき、観客の歓声がそれに混じつた。フイニーと隆正が演奏を聞くために出でていき、少しひつて、隆正だけが戻ってきた。落着いて聞いていられないやと隆正は言う。保男も黙りがちで、テーブルのピーナッツをつまんでは、胸に抱えたギターでフィンガートレーニングをしている。健次は譜面を見て、頭と足でリズムを取りながら、時々手でドラムを叩く真似をする。清史はきょう演奏する曲の注意点をひとつづつ復習しておこうと思ったが、ここまできて今さら言うのも、保男たちを緊張させるばかりかも知れないとやめた。

阿呂夢の演奏は聞かないつもりだったが、ただ待つだけではなかなか時間がたたないので、清史は客の入りがどうかを見ると自分に言いきかせて、客席のほうに回つた。横の扉を開けると、客の笑い声が清史を包んだ。ひげ男が語りをやつているのである。客席は暗くてよく見えないが、ほどんど満席に近く、三千人はいるだろう。清史は溜息をついた。テレビの威力をさまざまと見せつけられた感じである。由美子がどこにいるか探してみたが、わからなかつた。フイニーも見当らない。清史は阿呂夢の次の演奏が始まると前に客席を出、通路を通り、正面玄関から表に出た。そして夜の空に向つて大きく手を伸ばして、深呼吸をした。快い緊張感が彼を満た

していた。

阿呂夢の演奏の終る時間が近づいても、フイニーはなかなか姿を見せず、清史はいろいろしたが、出番ですよと言いにきた者とすれ違うようにして、控え室に戻ってきた。

「レツツゴー」と言つて、清史はフイニーの肩を叩いた。

フイニーは片目をつぶり、早口の英語で何か言つた。

ステージは暗く赤い光に満ちている。客席はそれ以上に暗い。ドラムは既に健次のものと入替つており、トイレに行つた保男を待つてから、清史たちはギターを持つてステージに出る。客席はざわついており、阿呂夢の演奏の余韻がまだ残つているようである。プラグをアンプのジャックに差込む。ドラムの断続的な音がする。弦を弾き、ツマミを回し、また短いフレーズを弾く。チューニング。

突然、ジャズのピアノ曲が流れ、暗い客席がオーッとどよめいた。清史は電気ピアノの方に顔を向け、よく見えないフイニーに笑顔を送る。フイニーの赤い光に染つた掌が見えた。

「用意はいいか」と清史は声をかける。膝がこきざみに震えているのがわかる。

「いいぞ」「オーケー」という声が返つてくる。「ケン、いくぞ」

健次がスティックを打ちながら、

「ワン、ツー、ワン、ツー、スリ、フォー」

特大のスピーカーからギターの音が爆発し、その爆風は清史たちの体を締めつけ、客席めがけて吹きつけていく。同時にスポットライトが次々とついて、清史たちを白い光の中に照らし出す。清史は思わず目をつぶり、しかし指は正確に弦を押え、弦を弾く。体が自然と動き、頭も胴も脚も空っぽになつて、その内側を音がはね回つているようだ。ベースが少々遅れ気味だが、構やしない。弾いて、弾いて、弾きまぐれ。

汗が噴き出して、額を流れ落ちる。ヴォーカルのところで、清史は声をマイクに叩きつけた。

清史たちはハードな曲を立て続けに四つ演奏して、一息入れた。大音響に圧倒されていた客たちは呆然とし、そして次の瞬間目が覚めたように拍

手と歓声が湧き起つた。ハードで始めてハードで終るというのが、きょうの清史の考えだった。その間にオリジナルとビートルズナンバーを入れて釣り合いをとろうというのである。

清史は拍手と歓声がおさまるのを待つてから、メンバーソロ紹介に移つた。清史のところだけスポットライトが当る。保男を紹介して、ライトが彼のところに移動したとき、「ヤスオ」という女の子たちの声が前の方で一斉に起つた。保男は片手を上げてそれに答え、短いパートを弾く。白い横幕が前の方で開き、別のスポットライトがそれをとらえる。側方のテレビカメラもその方に角度を変える。「GO、GO、ヤスオ」という文字が見える。『無常』で宣伝した効果があつたというわけだ。中央よりちよつと右の客席でも歓声が起り、同じような横幕が開いた。暗くて、しかも遠いから、何て書いてあるかわからない。

隆正、健次と紹介していき、最後にフィニーを特別ゲストとして紹介した。客席がどつとわく。フィニーはブルースっぽいジャズのさわりの部分を弾き、客席は一瞬しんとなつた。

紹介が終ると、客席は少し明るくなり、さつき見えなかつた横幕の字が見えた。「はばたけガリバー」と書かれてある。清史が目を細めてその横幕を見ていると、一人の少年が立上がりつて、手を大きく振つた。清史も反射的に片手を上げたが、すぐにきのうの少年だとピンときた。すると由美子もその近くにと思つて見ると、はたして横幕の右端に手を振つている女性がいる。隣にいるのは母親だろう。

きょうで解散なのに、はばたけはないだろうと思いながらも、清史はうれしかつた。それにたとえ解散しても、一人ひとりがはばたくことには変りがない。そう気づくと、清史は目の前が急に明るくなつたような気がした。

「紹介が終つたところで、予定としてはオリジナル曲に行くんですが、その前に一言だけしゃべらせて下さい」と清史はマイクに向つて話し始めた。声がホール内に反響する。語りはやらないはずだったので、保男が驚いている。

「実は、このコンサートはぼくたちガリバーにとつて、初めてのコンサー

トなんです。そして最後のコンサートもあるんです。なぜかというと、きょうでガリバーは解散するからです。つまり解散コンサートですね」

そのとき、健次の「キヤップ、それは違うよ」という声が重なったが、清史は構わず続けた。

「こんなところで解散なんてことを言うのも変なんですが、まあ聞いて下さい。実際、ぼくはいよいよきょうでお終いだなあ、なんて思っていたわけです。二年半、よくやつてきたもんだとね、一種の感慨にふけっていたんですね。ところがどうもそうじやないらしい。きょうは終りじやなくて、始まりなんじやないのかなという気がしてきたわけです。つまり、二年半、ガリバーの中で培ったサウンドが一人ひとりに受け継がれ、そしてそれぞれがそのサウンドをもとに、独自の音を育てていく。まさに、そこの横幕にあるように（と清史は指さした）はばたけガリバーという通りです。ですから、これからも、一人ひとりのガリバーにどうか声援を送って下さい」

由美子たちの席のあたりから拍手が起り、それは徐々に客席全体に広がつていった。口笛が鳴る。「カツコイイー」という声が聞こえる。保男も隆正も、言つちやつてくれましたねというように笑いながら、清史を見ている。

拍手がおさまって、清史がオリジナル曲の紹介に行こうとしたとき、突然、健次の声がスピーカーを通して、聞こえてきた。「あの、ぼくからも一言いわせて下さい

驚いて振返ると、健次はヴォーカルマイクを引寄せており、清史を見て少し笑つてから、またしやべり始めた。

「ガリバーは解散しません。今、リーダーの言つたことは、きのうまで本当でしたが、きょうはもう違うんです。もう一度言います。ガリバーは解散しません」

ケン、お前、と清史は呼び掛けたが、客席がざわつき始めたため、健次には聞こえない。清史は余程、健次のところに行つて、どういうつもりかききたかったが、もちろん、今はそんなことはできない。

清史は客席に向き直ると、ひとつ咳払いをして、マイクに向つた。

「えー、大変お騒がせして申し訳ありません。この世の中、先のことはど

うなるのか、さっぱりわからないもので、今、ドラムスが言つた通り、解散は取り止めになりました。どこがどうなつたのか、実はぼくにもわからないんですが、とにかく、ガリバーは普通の男の子に戻らないことになりました

ざわついていた客席がどつと笑い、また拍手が起つた。保男が近寄つてきて、「ケン、一体どうしたんでしょう」と言う。

「そんなこと、おれにきいても、わかるわけないだろう。とにかく解散はなし。今まで通りやつていくんだよ」

「そうですね。解散しないってことは、今まで通りってことだから。でも何だかおれ、きつねにつままれたみたいだなあ」

保男は首を傾げていたが、そのうち、「今まで通りか、こりやいいや」と独り言を言つて奇妙な声で笑つた。

オリジナル曲を演奏し始めて、ようやくこのままガリバーを続けていくという実感が湧いてきた。赤ん坊はどうするつもりなんだろうという思いが、ちらと頭をかすめたが、何とかなるさと清史は弦に指を叩きつけた。オリジナルのうちで△この世をバラ色の……▽がやはり最も手応えがあった。ひょっとしたら、これはヒットするかも知れないな、などと清史は調子のいいことを考えた。

ビートルズナンバーのところでは、清史は保男たちに無断で△フエン・アイム・シックステイフオーヴを歌つた。始めは清史のギターだけだったが、そのうちドラムが入ってきて、ベースもサイドも清史のヴォーカルに合わせて、控え目に鳴つた。

締めくくりのハードロックのところでも、清史は曲目をひとつ△ユー・シユック・ミーヴに変更した。このときは保男たちもすぐに納得した。演奏中、「はばたけガリバー」の幕を持った少年達が立上がり、その横幕を揺らし始めると、客たちもつられるように、少年達の回りから立上がり始め、しまいにはホール全体の人間が立つて、リズムに合わせて頭上で手を叩き出した。客席もステージも揺れ動いていた。汗みどろになりながら、清史は全身で声を出し、マイクにぶつけた。

演奏が終つて清史たちが舞台の袖に引込んで、拍手と歓声は鳴り止ま

なかつた。ディレクターの指示でもう一度ステージに出、メロディの美しい静かな曲であるヘグルーミースカイヽを演奏した。

アンコールが終つて、今度は本当に引込んだとき、清史たちは健次の周りに集つた。

「ゼツドはどうなつた？」と保男が尋ねる。

「ゼツドにはいかないよ」

「そんな、もつたいないよ。こんなチャンスはもう二度とないぜ」と隆正が言う。

「ばかやろう、何が二度とないだ。チャンスなんてこれからいくらでも転がつてくるんだよ。ゼツドなんてくそくらえだ」

「あ、やっぱりキヤツプが何かしたんでしょ」と保男が言う。

「余計なこと言わないで、さつさと控え室に戻れ」清史は自分のギターを保男に持たせた。

保男と隆正とフィニーが通路に出ていつてから、清史は健次に「赤ん坊はどうするつもりなんだ」と尋ねた。

健次は小さく笑つて、

「赤ん坊はおやじとおふくろが面倒見てくれることになつたんですね」

「いいのか、そんなこと」

健次の両親は新潟で文具店をやつているが、まだ高校と中学に通う弟と妹がいるので、経済的には苦しいはずなのだ。

詳しい話は後できくことにして、通路に出ると、「内藤くん、ちよつと」という声がした。振り返ると、あのスカウトが壁に右肩をつけてもたれかかる姿勢でこつちを見ていた。サングラスははずしており、それが胸のポケットに入っているのがわかつた。口許に笑いを浮べている。

健次が彼のほうへ行きかけ、清史も一緒についていこうとしたが、「ぼく一人で……」と健次が制した。仕方がないので、清史は少し離れて様子を見守つたが、そのとき誰かに肩を叩かれ、振返ると、阿呂夢のひげ男がいた。

「おたくらの演奏、よかつたわ、ほんまに。さすがは『無常』に出るだけのことはあるなあ」

清史は後ろの健次とスカウトの話合いに半分気を取られながら、「きみらもなかなかよかつたよ」と気のない返事をした。

「いやあ、ぼくらはまだまだですわ。ちょっと泥くさいしね」とひげ男は熱心に話しかけてくる。清史が、いやその泥くささはある意味では武器なんだと言おうとしたとき、後ろから、「いまさら、そんなこと言われたら、おれはどうなるんだ」というスカウトの大きな声が聞こえてきた。清史ははつとして振り向き、話がもめるようだつたら、いつでも行こうと思つたが、それきり大声は聞こえず、健次の後ろ姿とスカウトのうなづく様子が見えるだけだった。

「それはそうと、あのオリジナル、あんたが作つたんですか」とひげ男がきいてきた。

「まあね」

「いやあ、才能あるわ。うらやましいなあ。うちの、バンドにもひとつ曲を書いてもらいたいくらいや」

どこまでがお世辞かわからないが、満更でもない気分である。

「ガリバーいう名前、忘れへんわ」と言つてひげ男が右手を差出した。

「あんたのそのひげも忘れないよ」と答えて、清史は握手をした。顔に似合わず、やさしい手をしていた。

ひげ男が去るのを待つていたように、スカウトと健次が清史のところにやつてきた。どんな話でも受けて立つぞと清史は身を堅くしたが、スカウトは「まいっただなあ」とつぶやくように言つてから、小さく笑つた。「内藤くんは諦めたよ。彼の決意が堅そだからね。しかしまあ、舞台の上で突然反対のことを言われたら、誰だつて驚くよねえ。おれは彼がゼッドに入るのが一番いいと思って、やつてきたんだけど、きょうの演奏を聞いていたら、何とも言えなくなつてしまつてね。これじやスカウト失格かも知れないのでね」

こう簡単に矛をおさめられては、清史としても、何と答えたらよいのかわからない。まさか、ありがとうございますとも言えないだろう。清史が黙つていると、「それじやあ、またいい音聞かせてよね」と言つて、スカウトは去つていった。気に食わないやつだつたけど、それほど悪いやつじ

やないと清史は思い、何だか妙な気分だつた。

健次の話によると、ゼッドに移ることになるだろうと曖昧な返事をしていたが、きのう両親から赤ん坊のことは心配するなどという手紙が届いて、心が決まり、きょうにでもスカウトに断わるつもりでいたのだが、できないままでステージに出、そして清史の解散の話になつたのだ。

「あのときは本当にびっくりしましたよ。まさか、キヤップがステージで解散のことを言い出すとは思わなかつたから」

「おれだつてびっくりしたよ。一人ひとりのガリバーに声援を、なんてカツコいいことを言つたすぐ後で、解散しないなんて言い出すもんだから」控え室の前の通路には、十数人の女の子がたむろしていて、清史と健次が近づいていくと、ふたりを取囲んだ。そして「これ、ヤスオに渡して」「サイン、お願ひ」などと口々に言いながら、清史に、リボンを結んだ包みやらサイン帳を渡した。ものを言う暇もなく、清史と健次は手分けして手渡されたものを持ち、控え室のドアをノックした。鍵のはずれる音がして、隆正が顔を見せた。

中に入ると、ソファーに坐つていた保男が、「また来ましたね」と清史に笑いかけた。テーブルには既に小さな包みが五つばかり並べられている。「ほら、これ、みんなおまえにだよ」と清史は持つていた包みを保男に放り投げた。「あ、もつたいいない」と保男は床に落ちたやつも拾つて同じようにテーブルに並べた。

「サイン、どうします」と健次が数冊のサイン帳を示しながら清史にきいた。「あ、それもおれ目当てだから、おれがやるよ」と保男が言い、すでにサインペンも用意している。

「あきれたもんだ」

清史が、これも保男のもらつた缶入りのジュースを飲んでいると、テレビ局の人間が入つてきて、ギヤラの入つた封筒をくれた。受取にサインをしてから、清史は四万円を差引いた金額を四等分して、保男たちに渡した。四万円をフイニーのギヤラに当てるつもりなのだ。金曜日に打合せのためにテレビ局へ行つたとき、フイニーのギヤラのことを持出したが、悪いけど、もう予算枠が決つていてと体裁よく断わっていたのである。

保男と隆正はぶつくさ不平を言つたが、プロの仕事には金を払うのが当たり前だという清史の言葉で黙つてしまつた。隆正は、一週間もおれに世話になつたんだから、きつと受取らないと言つたが、フイニーは大喜びで受け取つた。「しつかりしてよ、全く」と隆正是感心した。

少ししてドアがノックされ、由美子だろうと清史は思つたが、そうではなかつた。ドアを開けた隆正が、外にいる人間と何事か小声で話をし、誰だろうと思つていると、その人間が中に入つてきた。五十前後の、よく陽に焼けた顔の男の人で、そのすぐ後ろには同年輩の着物を着た女の人がいる。ふたりは戸惑つている様子で、ひどく場違いな人間に見えた。しかし清史は隆正の照れたような顔を見て、すぐにピンと来た。近寄つていつて、「隆正くんのご両親ですね」と言うと、ふたりはお辞儀をし、父親が「息子がいつもお世話になつております」と小声で言つた。

「おれはね、べつに挨拶なんていいつて言つたんだけど、どうしてもつてきかないもんだから」

隆正が照れ臭さを隠すように、ぶっきらぼうに言う。父親が、昼過ぎに東京に着きましてと言つて、東京のことを話す。両親は長野で農家をやつてるのである。母親は、隆正が中学の頃からエレキギターに夢中で、勉強しないものだから、先々どうなることかと思つていたら、こんなに立派になつてという話をする。「うちのバンドは心配いりません。仕事はどんどんきますし、そのうちテレビにも出ますよ。それに隆正くんはテクニックも十分ありますから、たとえうちのバンドがだめになつても、プロとして十分に食つていけます」清史は両親を安心させるため、少しばかりほらを吹いた。隆正是苦笑いしていた。

そのうち、由美子が母親とみよ子をつれて入つてきた。控え室が急ににぎやかになる。

「よかつたじやない、解散が中止になつて」と由美子が言つた。

「そう、だから借金返済計画も中止だな」清史が答えると、由美子は笑つた。

「コンサートが始まる前から知つてたんだろう?」

「どんでもない。わたしもあの時初めて聞いて、みよ子さんにわけを聞い

たくらいよ」

「それでみよちゃん、どう言つてた？」

「どうつて？」

「気乗りがしないとか何とか」

「ううん、むしろ逆よ。彼女、こうなつてよかつたつて喜んでたわ」

みよ子は健次のそばにいて、何やら話をしている。清史は、何か大きな

借りを受けたような気持で、みよ子を見た。

由美子の母親がそばにきて、「清史さん、おめでとうございます」と言つてお辞儀をした。清史も「ありがとうございます」と言つて、あわててお辞儀を返す。

「ビートルズ、よかつたですわ」と母親が言つた。

「母はね、あなたが母の好きな曲をやつてくれたから、ご機嫌なのよ」

「ああ、あれ……」清史はあのとき、誰にもみんな喜んでもらいたいという気持で一杯だつたのだ。

由美子はそれから、横幕を振った少年たちの話をし、清史はその文字のことにつれた。

「解散するのに、はばたけガリバーはないと思つたけど、でも結果的にはよかつたな、あれ」

「あの文句ね、実はわたしが教えたのよ。子供たちがどんな文句にしようかつてきいてきたから」

「解散するつてわかつていたのに？」

「ええ」

保男がひとりソファーに坐つて、ぼんやりとしている。

「どうした、いろおどー」と言つて清史は隣に腰をかけた。「やけに元気がないじやないか

「みんな、いいなあ」保男がつぶやくように言う。

「何がいいんだ」

「だつてそうでしょ。リュウにはおやじさんやおふくろさんが来るし、ケンにはみよちゃんでしょ。キヤップには先生がいるのに、おれには誰も」「何だ、そんなことか。だつたら、おまえも両親を呼んだらよかつたの

に

「おれのおやじなんかだめですよ。てんでおれのことなんか、認めちゃい
ないんだから」

「あれ、あれ。おまえの口からそんなことを聞くとは思わなかつたな」
「また、そんなふうに言う」

「こりや悪かつた。しかし、おまえには大勢のファンがいるだろ。しかも
女の子ばかりの。それで十分じやないか」

「キヤツップ、おれ、からかつてんの」

「とんでもない、おれは眞面目だよ」

清史はそれ以上からまれたらかなわないでの、立上がり、さあ『ガリバ
ー』へ行こうと思つた。コンサートの前はバンドの解散式のつもりだつた
が、今は、前途を祝して飲みにいこうというのである。はじめは、保男た
ちメンバーとフイニーだけで行くつもりで、一人ひとりに声をかけたが、
隆正や健次がみんなで行こうと言い出し、結局、控え室にいる全員をつれ
ていくことになつた。控え室を最後に出たのは保男だつたが、彼は通路で
待つっていた女の子たちの一人につかまつてしまい、清史たちは放つてお
いて、裏口へ向つた。

「キヤツップ、待つてよ」という保男の声がした。清史が立止つて振返ると、
保男が一人の女の子の手を引っ張つて、小走りにやつてくるところだつた。
清史に追いつくと、「ねえ、この子一緒につれていいでしょ」と保
男が言つた。見ると、わたなべちかことかいう、この前、保男のギターを
抱えてきた女の子だつた。

「そりや、別にかまわないので……」

そのとき、三人の女の子がやつてきて、「ちかこ、今夜はどうする
の?」とそのうちの一人が言つた。

「あたし、悪いけど、今夜はヤスオと一緒に

「わー、ずるーい、抜けがけなんて」

清史はふと思いついて、「きみら、どこの高校?」と尋ねた。一番背の
高い一人が、私立の女子高校の名前を言つた。ちかこが、「あ、だめ」と
小さく叫んだが、遅かつた。

「やっぱり高校生か」と清史がつぶやく。

「どうしたの」「何か悪いこと言つた?」と女の子たちはちかこに尋ねたが、ちかこは、「気にしない、気にしない」と言つて笑つた。

「高校生でもいいじゃないですか。どうせ一つや一つしか歳は違わないんだから」

保男はまるで気にしていない様子である。

「ふたつ?」と清史は大きい声を出した。

「いや、ふたつかどうか知りませんよ。おれだつて初めて聞いたんだから」保男があわてて言う。

ほんとに近頃の若いやつらは(保男も含めて)どうなつてているんだと清史は思う。きのうの少年のことも頭にある。もつとも清史はまだそんなことを思うほどの歳ではないのだが。

「勝手にしろ」と清史は言つた。

清史とフィニーは自分達の車で、他の九人はタクシーで『ガリバー』に向つたが、清史たちが着いてみると、まだ誰も来ていなかつた。

「いらっしゃいませ」とカウンター内にいるママが言つたが、清史たちのほうを見て、ちょっと驚いた顔をした。水割りを作つていたバーテンもこつちを見た。ママと向い合うように坐つてゐる二人連れらしい男の客も、フィニーに視線を向けた。客はこの二人だけだつた。

「あら、ミタちゃんじやないの。ずいぶん久し振りね」

清史とフィニーがカウンターに腰を降ろすと、ママが近づいてきた。

「他の連中はどうしたの?」

「もうすぐ来るよ」

ママがフィニーに目をやつて、何かききたそうにしたから、清史はコンサートのことも含めて説明した。

「やつと元が取返せそうね」と笑いながらママが言つた。

清史たちのバンドの名前は、二年前、たまつた付けを帳消しにするという条件で、この店から取つたものだつた。バンドが売れれば、宣伝になると、保男が冗談半分に持ちかけ、ママも面白がつて、その話に乗つたの

だ。しかし清史たちは売れず、ママは「この店がつぶれる前に、ヒット曲出してよ」などと言い出す始末だった。

保男たちが遅れてやつて來た。二人連れの客が入れ替るようにして出していく。ママが「これからは貸切りみたいなものね」と言い、清史たちはボックス席の椅子を移動させて、カウンターの椅子と輪を作るようとした。その輪の中にボックス席のテーブルを置く。清史とフイニー、それに健次とみよ子がカウンターのほうに坐つた。ビールや水割り、それにジュースも交えて、乾杯ということになった。「何か言ってよ、キャップ」と保男が言い、清史は「いい、いい」と断わつたが、皆に促されて、仕方なく口を開いた。

「えー、何と言つたらいいのか。ぼくとしては、今夜、こういうことになるとは夢にも思つてなくて、予定としては、四人だけでしょぼくれた解散式をやるはずだつたんですが、どこでどう間違つたのか、こういうことになつてしまい、えー、とにかくこれからも頑張ります」

「何か、さえないなあ」と隆正がひやかした。

「早く有名になつて、この店のこと、じやんじやん宣伝してよ」とカウンターの中から、ママが言つた。清史がバンドの名前の由来を説明する。

「ううだつたの。道理で、偶然の一一致にしてはできすぎてると思ったわ」と由美子が言つた。

「それじやあ、ガリバーに乾杯」とママがグラスを上げた。みんなもそれをのグラスをかかげた。

酒が入つて、健次と話していた清史は、健次たちが正式に結婚、つまり籍を入れたことを知つた。保男もこの話を聞いていて、「ついに結婚したの。あーあ、ケンもいよいよ生活の中に埋没していくわけか」と言つた。

「おまえと違つて、ケンは地に足がついているんだよ。それに子供も生まれることだし」

清史が言うと、保男も隆正も驚いた顔をし、隆正が、「子供つて、ほんと?」ときいた。健次とみよ子が同時にうなずいた。

「あーあ、こりやますますだめだ」保男が茶化すように言い、「なあ」と隣のちかこに同意を求めた。「あたし、赤ちゃん大好き」とちかこはすま

した顔で言う。

「おれ、赤ん坊は嫌いだけど、つくる行為は大好き」

保男が同じようにすまして言い、ちかこは「いやだあ」と保男の肩に顔を隠す。みんなが笑った。あきれ顔で見ていた隆正の両親も声を出して笑つた。

由美子がみよ子のそばに来て、何か小声で言い、それから清史のところに来て、「わたしの言つた通りになつたでしょ」と微笑んだ。「参りました」と笑い声で清史が答えた。

ひとしきり、赤ん坊の名前についての話が出、それが尽きる頃、ママが、清史の作った曲を聞きたいと言い出した。隆正が近くに置いてある車までギターを取りに走り、カラオケ用のアンプをギターアンプにした。リードギターの一本だけである。

健次がカウンターを手で叩いてリズムを取り、清史はギターを弾きながら歌つた。△この世をバラ色……△だけですまさうと思ったが、意地もあって△ランダム通り△も歌つた。ママがやけに感心し、「わたし、ミタちゃんを見直したわ」と言い、「その曲、ふたつともヒットするわよ、絶対」と付け加えた。「ママの太鼓判じやねえ」と保男が言う。

「あら、言うわねえ」とママがにらんだ。

それから清史たちは三時半頃まで『ガリバー』に居た。もつとも十二時を過ぎたところで、隆正の両親と由美子の母親は帰つたが。由美子は明日学校があるにもかかわらず、「最後まで付合うわ」と言って残り、ちかこも清史が家に帰そうとしたが、保男にしがみついて離れなかつた。

おれたちのバンドにもキーボードが必要だという話のとき、清史はフイニーに、「しばらく日本にいて、おれたちのキーボードをやつてみないか」と誘つてみたが、フイニーは「それはうれしいが、子供たちが待つているので」と答えた。フイニーは、セネガルという国の英語教師募集の広告に応募し、アフリカに行く途中なのである。暇があればピアノも教え、子供たちとバンドを作つて、陽気によりたいと言う。

「ジャズか?」と健次がきく。「もちろん。しかしぴックもいい」フイニー

ーが白い歯を見せて笑う。

清史たちは、フイニーのまだ見ぬ教え子たちのために乾杯し、未来のバンドのために乾杯した。「バンドにはガリバーという名前をつけるよ」「いや名前は子供たちにまかせる」

みよ子とちかこは途中で眠つてしまい、ママが一枚しかない毛布をみよ子に掛け、ちかこにはコートを掛けた。

清史たちは二人をママに任せて、まだ暗い外に出た。ドアの所でママがフイニーに、ウイスキーのボトルを渡し、「船に酔つたら、これを飲みなさい」と言つた。由美子が通訳すると、フイニーは笑つて、わざと体を揺らし、封を切つていないボトルを口に当て、ラッパ飲みの真似をした。

清史の車は使わないで、二台のタクシーに分乗した。東京港に行く前に、隆正のアパートに寄つて、フイニーのリュックサックを持つてくる。荷物はそれひとつだけだつた。

フイニーの乗る船は貨客船だった。船内灯がつき、クレーンが赤白色のライトのところで、船積みを行つていた。港内は暗く、静まりかえつており、この貨客船の周辺だけが夜に取り残されているようだつた。それでも水平線のあたりはすでに蒼く染り始めている。少し寒くて、清史たちは腕を組んで体を搖つた。乗船手続きを終えたフイニーが、清史たちのところに戻つてき、由美子が船のことを尋ねた。船はイギリス船籍で、ケープタウンを回つて、セネガルに寄り、ロンドンに向うという。フイニーが由美子を通して、この前のサンフランシスコ・東京間の船旅の話をする。最初はいろんな食事が出てきて楽しかつたが、終りの頃は同じメニューになつてしまつたという話や、運動不足になるから、朝、甲板の回りをジョギングしていたら、船員たちも次々に真似をし、しまいには船長に差止められたことなど。

それから、アフリカから手紙をくれよなという話になつて、清史が隆正に「おまえ、フイニーに住所教えたんだろ?」ときいた。

「おれ、何も教えないよ」

「ばか。せつかくアフリカぐんだりまで行くんだから、住所ぐらい教えて

おけよ」

清史は保男や健次に、紙と鉛筆を持っていないかと尋ねたが、持っていない。由美子がバッグから手帳を取出した。一頁を破り取つて、手帳と一緒に清史に渡す。清史は手帳を下敷にして、自分の住所を書こうとしたが、気が変つて、隆正に住所を尋ねた。

「おれの住所でいいの？」

「そりや、おまえのところに一週間もいたんだから、その方がいいだろう」

清史は隆正の住所と名前を紙に書いて、フイニーに渡した。

「必ず、手紙をくれよ」

「もちろん」

「レコードを出したら、送るからな」

「子供たちに聞かせるよ」

しばらくして、甲板から誰かの叫ぶ声が聞こえてきた。フイニーが振り仰いだ。そして英語で何か答えると、再び清史たちの方に振返つて、「そろそろ出発だ」というようなことを口にした。

「航海の無事を祈っています」と由美子が型通りの英語で言つた。

「サンキュー」とフイニーは答え、それから一人ひとりに握手を求めた。最後に隆正と念入りに握手をし、肩を軽くたたいて何か言つた。

「先生、何て言つてんの」

由美子はフイニーに尋ね、フイニーは今度は由美子に向つて言つた。

「またいつか、リュウと酒を飲みたいって」

「まいっただなあ」隆正は頭に手を当てて、照れ笑いをした。

タラップを上つていく途中で、フイニーが立止まり、胸のGの刺繡を指さして何か言つた。由美子が、えつという顔をし、フイニーが大きな声で同じことを言つた。

「自分もガリバーのメンバーだと言つてるわ」

「あんたはいつでも、おれたちのバンドのメンバーだ」

清史は英語で叫んだ。意味が通じたのか、フイニーは笑つて手を振つた。タラップが引上げられ、エンジンの音が一層大きくなる。船体はゆつく

りと岸壁を離れ、黒い水が渦を巻いて、その間に流れ込んできた。

甲板からフイニーが手を振り、清史たちもそれに答える。フイニーのそばを通りかかった船員が、物珍らしそうに清史たちを見下ろし、フイニーと何か話をした。

空はようやく明るみを増し始め、貨客船は白い航跡を見せて進んでいく。「変なやつでしたね」と保男が言つた。

「ああ」

後部甲板に移動したフイニーが、手に何かを持つて振り始めた。それがベストだとわかると、清史たちもすぐにベストを脱いで、振つた。貨客船の人影はなかなか振ることをやめず、清史たちも腕を振り続けた。